1970

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年九月十日發行（毎月一回十日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

九月號

【第六十七號】

サッポロビール

エビスビール

アサヒビール

京城雜筆九月號執筆者

（大體原稿到著順）

平井三男（總督府商工課長）……讀西洋事情……（一）
西田常三郎（元山每日社長）……雜筆社に寄す……（三）
寺尾猛三郎（龍山寺尾組）……雅號の話……（四）
關根重憲（朝鮮時報主筆）……書齋漫言……（五）
伊藤龍（朝鮮ホテル）……ホテル漫筆……（六）
堰本隆（辯護士）……角力と訴訟……（七）
川端三次郎（角田商會支配人）……將棋……（八）
野崎眞三（朝新社會部長）……辰子の死……（九）
市村毅（總督府技師）……鑛山漫筆……（一〇）
加藤松林（東洋畫家）……義州の朝夕……（一一）
水谷九二吉（古河鑛業京城出張所）……仇討異聞……（一二）
鈴木文次郎（丁子屋商店支配人）……子供服の事……（一三）
川本竹松（鎭南浦電氣支配人）……男女のこと……（一四）
廣江澤次郎（實業家）……滿洲の夏旅……（一六）
新田耕市（新田株式店主）……人間萬事是相場……（一七）
中村巖（安取監査役）……銀賣買の話……（一八）
桑野健治（朝鮮信託常務）……スヽキと麥酒……（一九）
河西青苔（京城日報記者）……知事と禪師……（二〇）
別府西海（京城日々理事）……財界春秋……（二一）
田村直一（朝鮮警察婦人倶樂部主幹）……雜誌婦人くらぶ……（二二）
工藤重雄（書肆謙々堂主人）……喧々錄……（二三）
伊藤憲郎（京城覆審法院判事）……T總督の巡視……（二四）
中村郁一（京取秘書課長）……株界雜筆……（二五）
德野眞士（朝鮮鑛業會主事）……僑居漫筆……（二六）
伊集院鈞雄（京城日報記者）……心中餘談……（二七）
富田儀作（實業家）……人蔘の話……（二八）
岸巖（朝鮮銀行發行課長）……左團次のことなど……（二九）
權藤四郎介（朝鮮新聞副社長）……南大門下から……（三〇）
飯泉幹太（朝鮮銀行庶務課長）……鱸釣らざるの記……（三一）
櫻井小一（殖產銀行重役）……漢江雜記……（三二）
田中秀一郎（木村屋主人）……金剛山雜詠……（三三）
西村滿藏（京日編輯部長）……關白苦行記……（三四）
今村螺炎……涼臺艶話……（三六）
有馬純吉（京城日日新聞社長）……夏を送る……（三七）
堀內滿輔（ちゝぶや主人）……或る夫婦……（三八）
永樂町人……秋日雜記……（三九）

（其の他社友數氏執筆）

サッポロビール

エビスビール

アサヒビール

京城雜筆九月號執筆者

（大體原稿到著順）

平井三男（總督府商工課長）……讀西洋事情……（一）
西田常三郎（元山每日社長）……雜筆社に寄す……（三）
寺尾猛三郎（龍山寺尾組）……雅號の話……（四）
關根重憲（朝鮮時報主筆）……書齋漫言……（五）
伊藤龍（朝鮮ホテル）……ホテル漫筆……（六）
榎本隆（辯護士）……角力と訴訟……（七）
川端三次郎（角田商會支配人）……將棋……（八）
野崎眞三（朝新社會部長）……辰子の死……（九）
市村毅（總督府技師）……鑛山漫筆……（一〇）
加藤松林（東洋畫家）……義州の朝夕……（一一）
水谷九二吉（古河鑛業京城出張所）……仇討異聞……（一二）
鈴木文次郎（丁子屋商店支配人）……子供服の事……（一三）
川本竹松（鎭南浦電氣支配人）……男女のこと……（一四）
廣江澤次郎（實業家）……滿洲の夏旅……（一六）
新田耕市（新田株式店主）……人間萬事是相塲……（一七）
中村巖（安取監査役）……銀賣買の話……（一八）
桑野健治（朝鮮信託常務）……ス、キと麥酒……（一九）
河西青苔（京城日報記者）……知事と禪師……（二〇）
別府西海（京城日々理事）……財界春秋……（二一）
田村直一（朝鮮警察婦人倶樂部主幹）……雜誌婦人くらぶ……（二二）
工藤重雄（書肆謙々堂主人）……喧々錄……（二三）
伊藤憲郎（京城覆審法院判事）……T總督の巡視……（二四）
中村郁一（京取秘書課長）……株界雜筆……（二五）
德野眞士（朝鮮鑛業會主事）……僑居漫筆……（二六）
伊集院翰雄（京城日報記者）……心中餘談……（二七）
富田儀作（實業家）……人參の話……（二八）
岸巖（朝鮮銀行發行課長）……左團次のことなど……（二九）
權藤四郎介（朝鮮新聞副社長）……南大門下から……（三〇）
飯泉幹太（朝鮮銀行庶務課長）……鱸釣らざるの記……（三一）
櫻井小一（殖產銀行重役）……漢江雜記……（三二）
田中秀一郎（木村屋主人）……金剛山雜詠……（三三）
西村滿藏（京日編輯部長）……關白苦行記……（三四）
今村螺炎……涼臺艶話……（三六）
有馬純吉（京城日日新聞社長）……夏を送る……（三七）
堀內滿輔（ちゝぶや主人）……或る夫婦……（三八）
永樂町人……秋日雜記……（三九）

（其の他社友數氏執筆）

讀西洋事情

總督府商工課長　平井三男

京城雜筆

時は慶應四年戊辰の仲春に、福澤諭吉著と銘うつて、『西洋事情』と題する乾坤二册の和裝書が市井に發賣された、慶應三年八月と記した著者卷頭序の一節に

余が性質旅行を好み幸に其機會を得て萬延申の年はじめてカリホルニヤに航海し其後文久戊の年歐羅巴の諸國を巡歷し今茲は又ワシントン、ニューヨルクへ行き都合三度外國の旅行せしが色々珍しき事を見聞し云々

著者は更に筆を續けて

我日本國も近來は追々外國人と親しくなり殊に去年の夏は外國に勝手に行くべしとの官許もあり同時に太平海の飛脚船は出來いよ〳〵双方の交り厚かるべき兆にて云々

而して役人の手引の爲めとありて本書を出した所以を記して居る、愈本文に入れば先づ冒頭に

世界の形ちは圓くして球の如し故に之を地球といふ云々

全く小學讀本口調なるも面白し、そして歐米の文明を說いて

世界第一學問の世話行屆き人情おとなしくして兵力强く禮儀正しくして國富み天然の產物は少けれども人の工夫にて物を造り陸には蒸汽を用ひ海には蒸汽船に乘り何事も便利を盡し文武ともに盛なるは歐羅巴と亞米利加とに限る。

と感歎して居る亞細亞州等に付ては

產物は多けれども國人の生れつき愚にして學問の道開けず道具仕掛の目論見も出來ず一口に云へばつまらぬ國柄なり。

蒸汽船內の模樣を記して、

食事の間には巾三尺許りの長き臺幾個もありて其の上に馳走の品物並に銘々の皿茶椀をならべこの臺をテイブルと云ふ食事をなす者は周圍に寄集り寄合膳にて食事する姿なり云々

彼國の大便所は家の內にあるものも船中にあるものも其模樣少しも變らず一般高き所に圓き穴ありて此の穴に腰を据る趣工なり然るに初て外國へ行く人など其ことを心得ずして日本流にすると便所を汚しかならず外國人に笑はれて面目次第もなきことありよく〳〵つゝしむべし。

著者の切意到れりと云ふべし、歐州諸國の交通の便利を說明して、

歐羅巴の諸國には蒸汽車の路縱橫にわたり旅行するとて杖笠草鞋の用意にも及ばず其まゝ車に乘って百里や二百里の道は一夜の間にも行かるべきとなれば歐羅巴州の內にて遠國へ旅行するなどいふとも實は江戶より近在まで步行するほどの苦勞もなし更に馬車の一節に至つては興味津々である、曰く

外に出るには馬車と云ふものあり英吉利の言葉にてカリエイジと云ふ二人乘四人乘の車を馬百引かせ日本なれば駕籠の代になるものなれども駕籠よりも乘りよくしてはやし矢張り江戶の駕籠屋と同じことにて車屋へいひ付けて雇ふこともあり辻駕籠の樣に途中にて乘ることもあり又オミネブスとて乘合の馬車あり此の車は道筋をきめて一日に幾度も同じ道を往來するものにて人數二三十人も乘すべき大車なり一體に此車の賃錢は甚だやすし市中人通の多き通筋には此車、幾挺も往來する故市中の道筋をよく心得て此の通より彼の通へと順々に飛乘をすれば僅ばかりの賃錢にて終日も車に乘るべし

太平海飛脚船の立寄る場所と題する中に米國加州の狀況を記して、

カリホルニヤは新に開けたる土地にて世界中諸國の人寄り集り先を爭ふて渡世の道を勵む場所なり（中略）日本とカリホルニヤは正しく西東向合の隣國殊に此度は太平洋の飛脚船も出來僅か二十日の航路にて彼地へ渡るべく江戶から長崎へ道中するよりも手輕のことなれば日本の人も追々カリホルニヤへ出掛け元手あるものは交易商賣をはじめ元手なきものは金山に渡世をして遂には身代を仕出す者多かるべし此れ亦日本開國の恩澤なり

黃泉下の翁は即今の言語同斷な排日の狀態を何と感じて居るであらう、米國の黑奴廢止に端を發する南北戰爭の一條を說いて、

去る萬延元申年の冬に至り合衆國大統領の代替りに付次の大統領を入札にて人選せし所リンコルンといふ人へ入札の數多くして大統領となりしがリンコルン

京城雜筆

は固より北の方に左擠する人にて黒んぼうの一件に付ては兼て議論あることなれば南の方にては此人を大統領にすることを好ます（中略）翌る文久元酉年の春一味の國々十一州にて師を起しデイキスと云ふ人を頭取にして合衆國の支配をはなれ別に一の政府を建てんとの企にてこれより國の内南北二派に分れ大合戰の世となれり。

進んで外國貿易の方法を詳しく說明して居る、其一二を擧ぐればコンシュル勸め方の事とは領事勤務の事である、兩替屋（バンク）の事とは銀行事務の事である、災難請合（イシニヤランス）の事とは保險事業の事である、人の生涯の請合とは生命保險の事である。

翁は慶應二年初冬にも同じく西洋事情と題する和裝三册の出版を公にして居る本書の紹介は他日を期し唯其の一節を此處に披露しやう

傳信機とはエレキトルの氣力を以て遠方に音信を傳ふるものを云ふエレキトルの力は古來支那人の全く知らざる所にて自から本邦人の耳にも慣れず之を簡約に辨明すること甚難し云々

石炭を釜の内に密閉して之を蒸燒きにすれば炭の氣を發す之に火を點ずれば空氣と合して燃え其光油蠟燭の火よりも明なり

（中略）街道及び橋上の處々に瓦斯の燈臺を設けて往來を照らし光明晝の如し方今西洋諸國に燭を携へて夜行するものなし。

以上は翁の兩著の斷篇的の紹介に過ぎないが萬延元年初度の洋行は明治元年を距る僅に八年の昔第二回の文久二年は六年の昔に過ぎない、然るに此の単情記を讀み想を日本の現狀にいたすときは明治大帝の御宇に於て爲し遂げられた驚歎すべき日本の進步變遷が肯かれるのである。予は翁の此の二著に對するとき翁が確我が國民に此の力の發揮を將來に期待し且囑望して居る樣に感ぜられる此等の書は過去の記錄でなくして帝國の將來を談る豫言書の樣な氣がしてならぬ。

雜筆社に寄す

元山毎日社長　西田常三郎

◎松本さん、貴方の御手紙を受取ると私はヒヤツと致します、重さなる債務を果して居ない爲めに、ドウかして申譯的にでも何か書いて送つて置きたいと存じては居りますが夫れが今に出來無いのです實は如何に忙しいからと言ふても二十分間三十分間の原稿を書く時間の都合が付かない筈はないのですが、夫れが妙なもので、平生畏敬して居る名文家の貴方の御主宰で併かも全鮮の名文玉稿を蒐めた雜誌だと思へば何となく氣が退けて書けないのです、平生達意をのみ主として文章と云ふことに無頓著な生活をして居る私は何だか氣後れがして勇氣が出ないのです、だが之れッ限り退却して仕舞ふとは思ふて居りません、何とか一と工夫して是非何か書せて頂きたいとは考へて居ります、ドウカ時間をお與へ下さい。

◎昨年來海水浴の世話をして居ります、所がトテも忙しいです、此の頃は季節に入りましたので殆ど此の方にばかり沒頭して居ります併し設備は相當に完成し天惠の港灣風光と相待つて確に滿鮮を通じて第一等の海水浴場なりと信じて居ります私は是非之れを一度貴方見せたい見ていたゞきたいと存じます、一二日の暇を拵へて是非一度來て見て下さい、そして貴方の麗筆によりて此の浴場のことが例へ三行でも五行でも文字となつて現はるゝことがあれば私は非常な幸福を享受するのです、編輯の御都合で是非一二日の暇を拵へて來て見て下さい、衷心から歡迎いたします。

◈漢江の研究

吉田莊一

殖銀の櫻井さん、原稿を？といふとニコ〳〵して『左樣何か書かねばならぬとは思つてるが』『思つて居る許りでは困ります何か豫ねてお書きになつたものがありませう』『併しログなものはー』『イヤ兎に角拜見させて頂きませう』斯うして無數の舊稿中から記者が選び出したのが『漢江雜記』一篇

▲漢江は我々に近いが併し漢江の研究は十分に行渡つてるとはいへぬ▲河川としての利用にしろ、傳說としての文藝化にしろ――本稿はいはゞ未定稿であるが併し多くの暗示をふくむ所に記者は共鳴する。

雅號の話

龍山寺尾組　寺尾猛三郎

◆雅號或は樓號の由來を穿鑿して見ると頗る面白いものがあると想ふ一世の巨人公伊藤少壯にして氣を負ひ常に長〻を横へて悲歌慷慨天つ晴れ志士を以て自ら任ず、高杉東行之れを愛し呼ぶに俊坊を以てす俊坊意甚だ平らかならずと雖も奈何んともする無し偶ま辭書を繙いて奉畝の二字を得たり採つて雅號となす、好紀念なり。

◆福地源一郎北廓に豪遊し小櫻にのろけて櫻痴と號し、朝日奈知泉はお六さんに熱して碌室と號すと云ふ、共に健筆を揮つて天下を睨せる時代なり。

◆餘り故事典型に拘らぬ方が却つて味があると思ふ、星亭の日生は坊主臭いが子規が高濱清に虚子と名じたるは面白い。

◆二葉亭四迷は手前のやうなやくざものは苦太張つてしめいと怒鳴つた父を紀念したものだそうな、尾崎學堂は保安條例で警官に怒鳴られ愕堂と改め後ち學堂と改めた共に滑稽に類して居つて前者には涙が滾れ後者には骨が鳴る。

◆吉田東洋とか賴山陽とか大きく地名を取つたものもあるが、備前備中には黎陽とか黎中とか稱する人がある、齋藤總督が水滸より阜水の名を案出したるも面白い、附近の名山大川或は海とか城とかの緣ある大久保甲東、德富蘇峰、大岡硯海或は烏城、鷺城の類は屈指に違あらず、田能村竹田の竹田村から、同直入郡から、近くは元田國東が國東郡から、地名其儘を取つた類にもなかなか面白ろいものがある、京城では永樂町人が最も振つて居る、南山と稱する人はあるが寡聞にして未だ巴城と稱する人を知らない、商議會頭になつた渡邊氏は無外と稱して居るが、世間では雷公と呼び近江谷井堂は別に破鐘と呼んで居る其の人を想見するに足る。

◆工藤武城氏は擔雪と稱して居るが其書畫に於ける長足の進歩はなかなか雪を擔ふ井を埋むるよふな徒勞ではないらしい、烏滸がましいが余も公天と號して居るけれど其意義は判らない博識の人々に問ふても判らない唯字劃も好い音の響きも好いので用ゐて居る始め友人より贈られた古雅な銅印に公天と刻されてあつたのを其儘失敬して居る、印が主で人が從だから情けない、近來は土木の二字を取つて杜公天とも稱す中華民國人のよふだが敢て物茂卿の亜流を以て自から任ずる次第ではない。

◆曾て大倉組に屬して奥羽横斷線の鐵道工事に從事中、中山墜道より硫化水素が噴出して失敗し、流花醉臭と號したこともある、又平生柄にも無く慨然大志を抱いて天下に雄飛せんとするや久矣たが時到らず事非にして空しく陋巷に窮居す、因て鼠隣と號す、所謂虎も用ゐざれば鼠となりと憤慨せるなり。

◆余は對談中語尾に譯さと云ふ語を使用する癖あり友人露緣子『譯さ譯さと譯無いことを譯でもあるよに言ふ譯さ』と都々逸を作つて嘲ける。

◆余之れに對へて曰く『譯があるから譯云ふ譯さ其譯知らずに笑ふ譯』と、爾來輪袈裟の號を用ふ、樓名は猛三郎より脱化して竹寒樓の三字となり魯石翁の健筆になる扁額を懸けてゐる、友人柴田令五郎氏の樓名を百千樓と命じた蓋し百千は十萬にして零が五つ付く故令五郎に通ずるなり、其他會名なぞにも振つたものがあるが一寸思ひ付いて書いて見ようとペンを執るとさて材料が無いので何にも書けない、止むなく樂屋話しになつて了つた。

◈隱れた詩人

吉田莊一

總督府の調査課に、細川貞之亟といふ人がある▲國漢學の素養がたつぷりあつて、文章は簡勁、作詩は蒼古▲それに珍らしいのは、五十有餘歳にして嘗て娶らず、今以て獨身生活をつゞけて居る▲親もない兄弟もない、近しい親戚もない、何でも幼少の時は守屋庶務部長の宅でそだつたとかで、今では榮天氏や德夫氏の出世を唯一の樂みとして居る▲何の道樂もない人で、何百圓かの月給がいつもあまる、欲しいものを買ふがそれでもあまる『斯ういふ澤山の月給を頂いては濟まぬ〳〵』といつて居るさうな▲先づ當世には堀出しの人物だらう。

京城雜筆

書齊漫言

前朝鮮時報主筆　關根重憲

◎亭主の缺點を知つて居る女房は多い、併し女房の缺點を知つて居る亭主は少ない。

◎賢明な人とは、自分の女房の缺點を知つて居る人だ。

◎常識の圓滿なる人が常に持つて居る不滿は、世の多くの人々に常識の足らない事だ。

◎空想は、神が人類に與へた最大の自由だ。

◎情にほだされることは、理に降服する事だ。

◎親子でも金錢問題では多く他人になる、習慣が天性となつた中の最も悲しむべき標本だらふ。

◎子が生れた、無限の懷疑に價する事件だ、併し女房は平氣だ、子が育つ、其内自分も忘れて了ふ。

◎生程不可思議な現象はない、併し人は死ばかりに首を傾ける。

◎實現の可能性のないものは理想ではない。

◎戀愛生活から家庭生活へ、家庭生活から性的生活へ、性的生活から共同生活へ。

◎女子の參政權問題の解決は、女子が男子と共同で、此世を經營して居るといふ事實だけで足る。

◎本能とは、自然の力に對する人智の低級を端的に示す處の言葉だ

◎思ひ邪なし、人格即ち光あり。

◎天に月あり、地に風景あり、人に音樂あり、此世は生存するに足る。

◎日本の女性美は、男性の壓迫によりて鍛練されたものだ。

◎情死を促がすものは、情死が生む悲哀感だ、なぜならば悲哀は感激だからだ。

◎女には職業的個性がない、だから天下誰人の女房ともなり得る。

◎女に職業的個性のない事は、男子に取つて偉大なる天惠だ。

◎獨帝が別嬪の後妻を迎へて、平和に暮す事になつて、アノ世界の大亂は茶番化されて了まつた。

◎ロマノフ王朝の滅亡悲劇に、モット年代の昔がついたら傑作中の傑作とならふ。

◎死刑賛成三百六十一票、反對三百六十票、タツタ一票の差でルイ十六世は斷頭臺上の露と消へた、此一票程、近代政治制度の善惡兩面を語るものはなからふ。

◎無から有を生ずる偉大なるものは音樂だ。

◎表情は、人類世界のパスポールトだ。

◎都會は、人類の手に成る偉大なる藝術品だ。

◎宇宙の無限大といふ事は理論が許さないようだ、有限とする、有限をなす其物の厚みも亦無限といふ事は理論が許さない、結局どう考へてよいか解らない。

◎海中は、後世の人類に殘されたる征服地域だ。

◎法律は、政治の道具に過ぎない

◎一年三百六十五回、忽焉として朝眠がさめると同時に『我』を發見する、そして淡い人生觀を促がされる、併し曾て結論に達した事がない。

◎禪定とは、手製の極樂境だ。

◎宗教家は、宗教の藝術化を宗教の下落だといふ、併し歴史は、大なる宗教家程、宗教を藝術化した事を語つて居る。

◎人は或る人を賞める、併し他人が賞めはじめると沈默する。

◎靜寂の絶對境には、神のさゝやきがある。

◎初めは云ひ知れぬ嬉しさに涙ぐみ、やがて悲しくなり、終りには無我の境に入る、皎々たる明月の謂だ。

◎三味線は日本の偉大なる發明品だ。

◎其聽者の肺腑に迫るの深刻さに於て、日本の義太夫に匹敵する歌樂は、世界にならふ。

◎悲哀感は、情性の偉大なる淨化力だ、物の憐れを知る日本國民の情操の高き所以。

◎極樂の世とは、職業の消樂化した時代だ。

◎偉大なる平凡とは、多くの眞理が妥協したものだ。

◈小林氏の事

吉田莊一

丁子屋主人小林源六氏は、今では朝鮮佛教の再興に晩年を捧げて居る▲その熱心なことは迚もお話にならない▲此間も私財十萬圓をポンと投げ出したといふ噂さ▲所で丁子屋といふ大舞臺だが、之れは小林氏の娘で鈴木さんといふマダ三十四五の人が居つて、縱横に切り廻して居る、頗る敏腕家で、議論も立つ▲だから小林さんは安心して、佛教道樂に浮身をやつせるわけだ、結構な小林さんだ。

【M】

京城雜筆

ホテル漫筆

―お泊りの方々に―

京城朝鮮ホテル　伊藤龍

◎現在、吾が國人のホテルを利用する事夥しい數位を示すに至つたのは、面白い現象で、と同時にホテルの價値の普遍的に認められたのも、ホテル當事者として喜ばしい次第です。

◎どうも、ホテル利用者にしてもホテル習慣、換言すれば、ホテル宿泊條件を心得て居らない諸君が多い樣で偶々失敗をなさる御方を見受ける。勿論、歐米的習慣と私共のそれと、相違もあるでせうが赤々裸な失敗も誠に笑止の至りで別に深く羞恥を感ずる必要はないが、要するにホテル習慣を知らないから失敗を招く樣になる譯で、私はホテル習慣として利用者の心得て置くべき二、三の事項を擧げて、數々の失敗を除きたいと思ふ

◎そこで、宿泊申込は、可成く豫約手續による事です。それは、旅行シーズンには多數の旅行者は、みな宿泊を必要として居るので、どうしても客室が滿員に成り勝ちですから、ホテルに到著と同時に宿泊申込をする場合に、空室のない時に出會する事屢々ありますので其場合旅行者の迷惑此上も無いと存じます。其シーズン如何に拘らず、豫約手續により宿泊を申込む方が、宿泊者にせよ、ホテル當事者にせよ、すべて便宜があると思います。豫約方法は、電信又は書信によつて、到著時日と部屋豫約の意味をホテル事務室宛通知して置けば宜敷いのです。

◎次に、宿泊料に就いては歐式と米式の二種類あります。歐式宿泊料とは規定の室料及入浴料込み値段で、米式宿泊料とは朝、晝、晩の食事料、入浴料並に喫茶料込み値段です。米式契約で宿泊した場合に所定の食事中、一回しないとしても、その料金は控除されない譯です。

◎それから部屋に就いては、シングル、ベット附及びダブルベット附の二種類ありますが、時としては專屬のバース（風呂）附の場合があります。最低の室料宿泊者は共同バースを使用する事になつて特に專屬バースとして所望する場合は所定の料金を申受けられますシングルベットとは小型の寢臺でダブルベットとは大型寢臺です。部屋には電鈴の設置がありますので、それにより部屋給仕が御用命を承はるのです、部屋給仕を監督する者に給仕長と云ふ者が居つて給仕及部屋等に對する責任者です

◎宿泊者が左項にふれるものは宿泊を拒絶されます。

（イ）服裝の整はざる者、又は外觀の著しく見苦しき者、（ロ）泥醉者、（ハ）傳染病又は他の嫌惡すべき疾病者、（ニ）風紀を紊亂する虞ある者、（ホ）館内の秩序を紊り、其他、自他に危害又は迷惑を及す虞ある者。

◎尚ほ亦た食堂出入の際は、殊に和服にては御羽織足袋又は御袴足袋を召す事、食事規定時間中に食事をして戴く事、食事中は靜かに會話も可成く大聲を發しない事勿論放歌などは食堂内では許るされて居らない位です、態度は飽く迄紳士的嚴肅にするのです。

一、宿泊した場合

（イ）外出の際、部屋の鍵は必らず事務室に預ける事、（ロ）留守中受付の書狀及電信はすべて事務室の鍵箱に保管されて鍵の渡される際、ともに受取らるゝのです、（ハ）午後十時以後室内へ婦人の訪問を禁じられて居ます、（ニ）夜間、他宿泊者の睡眠を防害する樣な行爲はしない事、（ホ）出發後郵便、電信の轉送先を事務室に通知する事、（ヘ）すべての事故に付いては、必らず事務室のオフイス員と相談する事、

◈無駄足の記

平田久雄

三戸萬象君、何か涼しさうなことを書いてくれと賴むと、よろしい引受けた、但し涼しいとより僕の藝術上の氣焰を揚げさせてくれとあるそれも面白い何分賴むと約束したのが過ぐる七月のと▲爾來思ひ出しては督促するが先方はけろりとして昔〳〵そんな約束もあつたかといふ顏付　責めるに責められない、マルデ石臼で魚をとるやうな話▲畫家といふものは罪がなくていゝ▲モ一ッ罪のない話は南山町の池田病院長、八月號には屹度書くと力むで居たがその晩するりと元山へ避暑に行て了つた▲九月號には是非にといへば、今度は間違ひないといふ、そこで亦た訪ねて行くと『どうも元山は氣に入つたといふので、先生は四五日前から又元山行です』之だから雜筆社員はヨケイ暑い。

相撲と訴訟

辯護士　榎本隆

◇相撲は主として體力の爭であり訴訟は頭腦と口との爭である。併し近時の相撲は其勝負を決するに體力及技術のみならず、頭腦の働き如何に依り重大なる因果關係を來す場合が多いから、一言にして謂へば、相撲と訴訟との別は體力と口との差なりといふとも出來る

◇體力と口との差別である相撲と訴訟とを比較するは、聊か當を得ないかも知れないが、兩者――特に訴訟中の民事訴訟と相撲――とは一面に於て、非常に類似した點を持つて居る。相撲取が土俵上に於て凡ての情實を排し、龍虎の爭をなし、行司其勝名乘をあぐる點は、恰も民事訴訟に於て、原告被告が法廷に黑白を爭ひ、判事は嚴正公平に事案を判斷し、其勝敗を宣告する點に相類し、又相撲に物言がついて、取り直しの場合は民事訴訟に於ける控訴及上告の訴訟手續が許されて居る點に能く似て居るのである。

◇然り而して、自分が本題を選んだ理由は、特に相撲の審判規則と民事訴訟の裁判規定とを、簡單に批評して見たいからである。

◇相撲道に於ては（一）土俵上に於ける双方の力士が、其力量相伯仲し、相當の時を經過するも、勝負決せざるとき、（二）力士の一方若くは双方が痛みを生じたるとき等の場合には、行司は自身一個の自由なる認定の下に、引分の決定を爲す權限を有する、亦た（三）兩力士の何れか先に土つきたるか、土俵を割りたるか、仕掛けたるか等の場合には、行司は自身一個自由なる心證を以て、獨斷專決することを得ないのである　必ず東西の控力士及立會ひたる檢査役の意見を聞かなければならない、而る後行司は自由なる心證を以て勝負若くは預りを宣言する權限を與へられて居るのである。

◇自分は相撲道に對しては素人であるが、若し前記の規則にして相違なしとせば、特に（三）の場合の審判規則に大なる興味を有するものである、流石に相撲は我古來の國技にして、其審判の規則の如きも、多年の經驗に基き作られたる丈けに、完全なものである。

◇民事訴訟法の裁判の規定は此相撲の審判規則に比して缺點あるものと思ふのである。即ち我民事訴訟法に於ける訴訟手續は獨逸の民事訴訟法を基礎として制定せられたるものにして、當事者主義を採用し、國家不干涉を原則とするが故に、當事者双方が互に進んで和解の申出を爲す場合の外は、事案の性質上如何に和解を適當とする場合でも判事は其勝敗を決しなければならない。然るに日々裁判所にて取扱はるゝ多數の事件の中には（イ）法律上の解釋適用としては、當事者の一方を負かさねばならぬが、事情誠に氣の毒にして、何とか相當の色をつけてやる必要ある場合（ロ）當事者双方の提出する證據が殆んど同程度に、双方に利益ありて、黑白の判斷に迷ふ場合（ハ）當事者の一方が曾て辨濟を受けたる債權證書が尙筐底に殘れるを奇貨とし、二重請求の訴を提起したる場合、其他之に類する場合時々發生するのである。

◇斯樣な場合には、相撲にては、行司が引分又は預り等の强制和解の權限を與へられて居るが、民事訴訟法にては、判事は當事者より和解の申出なき限り、必ず何れかに勝敗の判決を下さなければならないととなつて居る。而るに其判決は判事に於ても確信を有せざるが故に、非常に不愉快なるべく、又其判決が事件の核心を摑み得ざりしときは、即ち偶々眞實に反する判決なりしときは、其敗者は世を怨むに至るであらう。

◇是等の缺點を救濟するのは、どうしても、我民事訴訟法の裁判の規定を改正せなければならぬ。

此改正に就て、斯うもしたらばといふ私案の概要を記して擱筆することゝする。――我國に於ても行く〳〵は施行せらるべき刑事々件に於ける陪審制度の如く、民間より選ばれたる陪審員と老練達識なる判事とを以て、奇數の會議體を組織し、之に强制和解權限を附與し若も判事或事件を審理したるも判決を下し難く、强制和解裁判に移す必要ありと認めたるときは、本件は强制和解裁判所に移送すとの決定を下し、直に一件記錄を送致することとする。右記錄の送致を受けたる合議體は更に辯論を開き或は之を開かずして、愼重審議の結果原告の請求金額の半々、四分六、或は七分三分等社會一般人が首肯する判決を下すととせば、當事者双方互に諦め易く、結局無事平穩に大なる不平もなく落付くものと觀ぜらる

將棋

鍾路一丁目
角田洋服店　川端三次郎

將棋指し親の死に目にも遇へぬとは、古來人の云ひ傳へて居る所である、それ程將棋は面白いもので熱し來れば夢中になつて仕舞ふ、夜などになつては、夜半も過ぎて一時にならうが、將又二時にならうが、一向お構ひなしである、總じて勝負事といふものは悉く同じで、圍碁然り、かるた然り、撞球も亦然り、此の間の趣味は到底局外者の味ふことの出來ないものである。

凝つては思案に能はずとかや、落語家先生より屢々說き聞かされて居るが、餘りに凝り過ぎては、所謂其好む所に淫するもので、弊害は免かれまい、併し人間といふものの只齷齪たる生活に追はれて居るのみが能ではあるまい、趣味の一ッや二ッは有つて然るべしだ、此點から云へば將棋や碁は先づ同好者の多い娯樂の一といへるであらう、我國の將棋には大中小の三種があり、通常普及されて居るのは小將棋である、大中將棋は駒の數もそれ〳〵多くなり、一度取つた駒は再び使用が出來ない、即ち眞の戰爭と同樣で、戰死者は再び戰場に馳驅する譯には行かぬ、又中將棋にては王將の隣に醉象といふのが在つて、それが成れば太子となり、よし王は殪れても、太子が存在せる以上、負け將棋とはならず尙戰を繼續する、其處に又一段の興味がある譯である。

朝鮮にも我將棋に似たものがあつて、路傍などにでも、時としては地面に劃を畫きて迄輸贏を爭つて居る、西洋にはチエスといふ將棋があつて、其チヤムピオンなどは中々大した勢力があり、世界の大政治家などゝ伍して、偉人名鑑に其名を列して居る。

僕は曾て濠洲より歸朝の折、英船エムパイヤ號に搭乘したが、船中無聊、或る日社交室にて談笑しける時、メルボルンの銀行家某氏僕にチエスを知らねば敎へて遣はさうと申出でた、當時僕は未だチエスを知らなかつたから、さらばと敎を乞ふた、一應駒の運法を說き聞かされ、さて手初めに一勝負仕らんと挑まれた。

然る處案外又案外、僕は臍の緖切つて初めての西洋將棋の勝負に、見ん事僕の先生を負かしてしまつた、先生は呆氣に取られ、お前は初めてなんぞとそれは嘘だといふ傍にニューサウス、ウエールス州上院議員マケラー氏あり、僕の袖を曳いて曰く、あの人がチエスなんど分るものか、僕が代つて敎へて上げようと、入れ代り局に對した、成程此の人は大分强敵で初心者の僕では、到底勝つ事が出來なかつた、道理で此の人は餘暇にはチエスの定石本を見て研究して居つた。

まアこんな譯で、西洋將棋を知り始め、航海中數日後には既に船客の誰れ彼れと負け退き勝負を爭ひ相當の成績を擧げた。

其後數年歐洲に遊び、英京滯在中同宿に白耳義の三婦人あり、母子連にて倫敦見物に來て居るのであつた、一日夕食の折其長女が將棋を指さうと云ひ出した、此の婦人は餘程斯道の熱心家と見えて、旅行用の小盤を携帶して居る程の熱心さである、さて久し振りで一戰に及んだ處が、こはそも如何に僕の方が旗色良く、十戰十勝、お孃さん非常に口惜しがれども、終に如何ともなし得なかつた。

僕は夫れ以來チエスを遊ぶの機會を得ないので、暫く中絕して居るから、今は既に忘れた氣分がする併しながら、原理に於ては日本の將棋も西洋のと同一である、朝鮮のも或はさうではないかと思はれある。

さて斯く申せば、僕は頗る將棋に强の者であるかのやう聞ゆるかも知らぬが、實はまだ〳〵犢鼻褌擔ぎで、下手の何とやら、濱さんなどには、常に弟子扱ひにされて居る弱虫である。

僕には既に親亡ければ、其死に目に遇へぬなどいふ心配は更に入り申さぬ、今後尙研究を積んで、斯道の大家糞喰への域に上達したい心願である。

◈夕立雲雜句

河野政廣

お笑ひ草にもと、最近の拙句を左に書きつけます。月々の京城雜筆——興味深く待つてゐます。

梅雨徒に聳え立つ雲の峯
眉あげて夕立雲を見つめけり
林泉の氣を養うて默しけり

京城雜筆

辰子の死

朝鮮新聞社會部長　野崎眞三

▼

義妹辰子が八月三日午後五時、溘焉として死去した。未だ二十一歳の若い身空で僅々一日の病臥に忽として死んだ此事實に直面し死と云ふ事を凝視すると、苦闘に滿ちた人間哀史の最後の頁としては果敢なさ過ぎると思ふ。其前晩には京城ホテルに私達夫妻と共にアイスクリームを啜つた辰子が翌日は冷めたい屍となつたのであるから死と云ふ事實は全く無造作なものだと思ふ。

▼

落魄した若米家に生れた辰子は不遇な運命に育つた。そして戀も命も三味線に打込んで長唄に精進した辰子の唄と三味線は確に杵屋佐多枝社中でも光つてゐたのだ。辰子の長唄は晩餐後の私への慰めの一つであつた。彼の冴へた撥捌きも太い聲も最う夢である。死と云ふ事は夢のやうだ。

▼

四日告別式を終つて棺の蓋に釘付けする前、私は片白粉の辰子の顏を凝乎と視た。寢顏と少しも變りのない生命の歡喜に溢れた丸顏、艶々した皮膚、然し辰子は死んでゐるのだ。派手な撥袱紗に包んだ撥と長唄の本、川路柳虹の初戀を胸の上に載せて最後の接吻を送つてから石で釘を一つ宛打つた。來合せた佐多枝師匠も私と一緒に此死顏を見て聲を揚げて泣いて呉れた。死と云ふ事は切なくも苦しくも悲しい。

▼

去年九月、親しく大震災地を踏んで本所の被服廠跡や横濱の正金銀行前に行つた時、累々たる死屍を視て死と云ふ事の果敢なきを痛感した。死と生とはホンの刹那を異にした背中合せだ。死にたくなくも死ぬ運命を如何ともならぬと同樣に死にたくも死ねぬ人もある。死と云ふ事は全く偶然の出來事だ

▼

八月三十一日まで嬉々としてゐた關東地方の人達が九月一日の死を豫め知つてゐたろうか。イヤ義妹辰子にしても數日後に來る死を待つてゐたか。死は全く偶然だ。運命は悉べて偶然だ。偶然に生れて偶然に死ぬ事が人間の運命なのだ

▼

運命を必然的だと肯定する人がある。然し私は運命は偶然だと信ずる。今日の科學では偶然と思ふより仕方がない。其死に直面した私は、死を希ひもせぬし、又死を恐れもしない、希つても恐れても偶然に來る死と云ふ事を如何とも出來ない。死と云ふ事に直面しても私には所謂宗教的氣分は湧かなかつた。

▼

太く短く暮らす。死と云ふ事が偶然であればある程人生は其瞬間、其刹那に最善を盡し本人の私が愉快であれば道德も糞もない。然し人生の最後は人間の最高道德であり人間の理想である、太く短くと云ふ事は決して不合理で不道德で利己的で暮せと云ふ意味ではない誰でも眞劍な努力の後に來る刹那的な喜びである。

▼

理想も道德もない。太く短く暮らす事が人間最高の道德に一致する境地こそ私の希ふ理想境である、孔子の所謂『則を越えず』の大道である。此道を踏まふと思はなくも自然に大道を踏みつゝ太く短く暮そうと思ふ。死と云ふ事に直面して一層、太く短く暮らそうと思ふ。

◈藤井氏の事

吉田莊一

不二興業の藤井氏は若い頃、熊本に在つて實業界に活躍した例の二本木遊郭の曉雲――曉雲のストライキで聞へて居る中島茂七も、當時米界、株界で雄飛し、藤井氏とは面識の間であつた▲その後藤井氏は渡鮮し、今では半島の干拓王として、朝鮮を知るもので氏を識らないものはない▲所で一兩年前藤井氏が上京すると偶然東京驛で中島老人と邂逅した▲スルト老人喜ぶこと劇ならず、同行の人々を藤井氏に紹介してサテ曰く『矢つ張り俺の目鏡は高いのう、あんたと睨意にしたのはザット二十年の昔あんたは二十三四でもあつたらうか、行く〳〵名を成す男ぢやと睨んで居たが、やつぱり俺の目鏡にクモリはない、ウーン俺の眼は高いナア』老人矢鱈に氣焔をあげるので、流石の藤井氏も頗るヘコタレたといふ。

鑛山漫筆

總督府技師　市村毅

◎鑛山や炭坑の坑内と云ふと其内容を知らぬ人は定めし氣味悪く感ずるであらうが、然しそれも始めの内だけで、馴れると此暗黑世界にも亦格別の趣を見出す樣になる冬暖くて夏凉しい坑内の生活、殊に夏の極く暑い時には其處はどんなに樂天地だらうか、深い斜坑の底にでも佇んで居ると、あたりに漂ふ冷氣のために今まで倦怠し切つて居た心が忽ち蘇へる許りでなく、遙に小さく坑口によつて限られた蒼空を動くともなしに動く綿の樣な雲をヂッと見上げて居るときには、何とも云へぬ靜かな落付いた心持になることがある。

◎カンテラを賴りにとぼ〳〵と歩いて行く坑内はトロでも通過せぬ限り物凄いと云ふてよい位靜かである、聞ゆるは只自分の足音と天井から滴り落つる水の音許り、而して闇の中を何處からともなく坑木の黴の臭ひが漂ふて來る。

◎眞暗な坑内をたつた一人で歩きながら淋しがつて居るときに、遠くカンテラの灯がチラリと見えると妙に心强く感ずることがある、人の影は見えぬけれど、ゴトン〳〵と軌る音が次第に近付いて來るのに向つて、懷しさの餘りオーイと呼んで見ると、先方でもオーイと答へる、其内に闇の中から眞黑な大男がトロを押し乍らあらはれて來て、無言の儘再び闇の中へ吸ひ取られる樣に其姿を掻き消して終ふ坑内は再び以前の靜けさに戻つて行く。

◎坑内で發破の音位平靜な心を動搖させるものはあるまい、それが内地の鑛山であるならば、闇の中から『發破だヨー』と言ふ聲が聞えて三十秒と經たぬ内に突然ガーンガーンと云ふ大きな音が坑内中の空氣を震動させて響き亘る、ハッと思ふ瞬間に手に持つて居たカンテラが消えて終ふ、實に不愉快な極みである、若し此あとで直く切端へでも入つて行かうものなら其處には呼吸が詰まり相に火藥臭い煙が渦卷いて居る、そして壁からは時々物淋しい音をたてゝ岩の塊が轉り落ちて來る。

◎坑内でカッチン〳〵と云ふ鑿鎚の音を聞かぬ位物足りぬことはない、それ程自分はそれが好きである、何と云ふ緊張し切つた然も調子の整つた響であらうか、其音に引ずり込まれる樣にして切端へ入つて行くと、奥の方にはポーッと灯が輝いて、其側に向ふ鉢卷した男が『一心不亂にタガネを廻しながらそれへ打ち込んで居る、小山の樣に盛り上つた肩と腕の筋肉は見るから氣持よく動搖する、其男の額と脊中とは水でも浴びた樣に汗が流れて居る、あたりは水蒸氣がこもつて汗臭ひ臭ひがプーンと鼻につく。

◎サラ〳〵と天井から砂が落ち始めた、『オヤ何だか危いですよ』と注意して三尺と退かぬ内にズスンと岩の塊が落ちた、落盤！實際坑内で恐ろしいのは炭坑に於ける瓦斯の爆發と此落盤とである、年々歳々此種の凶事のためにどの位人間の尊い生命が損はれて行くであらうか、然もそれが不慮の天災であるだけに諦めのつかぬ人が多いであらう、坑内をアナと呼んでさえ緣起が悪いと顔を顰める坑夫は、どんなに此出來事を恐るゝであらうか、それ許りでなく坑内で口笛吹いてすら、山神さんが荒れると云ふて、それを嫌かる連中を時折見受ける。

◎『サアこちらの方から昇つて下さい、少々危いですから御用心を』と坑内係に注意され乍ら眞直な梯子を昇つて行く、濡れてぬる〳〵して居る梯子の段々には足がかりが悪い位に泥が詰まつて居る。片手に鑿鎚、片手にカンテラを持つて居る身體は稍々もすると面喰つて動けなくなることがある、上へ昇つて行く人からは遠慮なしに泥をかけられる、又下の人へは泥を落すまいと努めるのが心苦しい、時とすゝと堅坑に梯子が無いことがある、そう云ふ場合には壁に兩手兩脚を突張つてそろ〳〵昇らねばならぬ、上を見ても眞暗下を見ても眞暗、若し此際不幸にして足辷らしたならそれこそ萬事休すである。

◎通氣の不完全な坑内へ奥深く入り込むと瓦斯が溜つて居ることがある、斯う云ふ時に限り手に持つカンテラの灯が不完全燃燒して、それが消えたら最後容易に再び灯を點すことが出來なくなる、それに長く佇んで居れば居る程頭が痛くなり、額からは汗が止め度もなく流れ落ちて身體中がぐんにやりして終ふ、人によつて其影響が違ふかも知れぬが、是もやはり輕い瓦斯中毒の現象だと思ふ、然し坑夫は斯んな不衛生な寧ろ危險な場所に於てもパンを得るために蒼い顔をして働いて居る。

京城雜筆

義州の朝夕

東洋畫家　加藤松林

□

先生――昨日此處へ來ました。すぐ、郡守を訪ねるつもりで電話をかけましたところ、折惡しく留守でしたので、宿の浴衣のまゝ附近を歩いてみることにしました。

スケッチブックばかりを持つて大通り――といつてもこの他には街らしい通りもないのですが――漸々爪先上りの道を登つて行きますと、その端れに以前道廳であつたところ、いまの郡廳、師範學校などの入口がありました。

宿の女から聞いたとほり、道はそれから少しづつ狹くなつて、左右に曲りながら小松、雜木などの疎らな中を登つて行くのです。隨分急な坂でした。それに強い午後の陽に照りつけられて、手足や帶のあたりはひどい汗になりました。

しかし、目指す統軍亭はすぐでした。やゝ展けたところへ出たと思ふ間もなく、さつと涼しい風が吹きつけて、石段が見へ、上には繪葉書で馴染の姿が立つてゐるのです。鮮人がたくさん晝寢をしてゐます。ハーモニカなど吹いてゐるのもあります。

急に目の前が廣くなつたやうな氣がしました。しかし腰かけて見下ろした時は何だか川幅は非常に狹いやうに思はれました。虎山がすぐ目の下に低く、遙かな野を隔てて支那の山々がぼうと霞んでゐるのです。

流れよりは野の廣さが先に感じられます。しかし、とは言へ流れも隨分廣いらしいのです。白い帆がゆきます。いくつもゆきます。ぢつと見てゐる目にも動くのが見へない程ゆつたりと流れてゐます。乘つてゐる人たちは、細い毛書の筆でぽつりと打つた胡粉の點のやうです。筏も流れてゐます。丁度箸を十本ばかりごちやごちやと緊いだやうです。

で、隨分河も廣いと感じるのです右手の山裾の木立の間には九龍浦の部落が見へます。左は、河がいくつにも分れてゐて、果ては新義州の方になつてゐるのでせう。繪にはならない景色です。

□

昨夜は夕立で、それに陽が暮れて人を訪ねるでもあるまいと早くから寢てしまひました。

今日は朝から雨です。今、郡守に會つて、展覽會の相談をして來たところです。午後からこの丘の上の宿で開くことに決めました、いま、準備が出來て、人の來るのを待つてゐる間にこれを書いてゐます。

郡守は以前に一度會つたことのある方で、大變親切にいろいろと話してくれました。

何しろ狹い所で、それに道廳移轉後の寂れやうつたらないのです。

――おや、隨分ひどく降り出しました。丘の上にあるのでよけいひどいのです。

誰れか來たらしい。

□

――姐さん、蠟燭をも一本ください、これぢやあまり心細い。

先生、

いま大變な暴風雨です。お午過から漸々ひどくなつて、去年のやうな出水になりはしないかと心配してゐます。此處へ集つてゐた人たちも歸られない始末でした。

すぐ目の前にある火見臺すら見へない位です。便所の横のアカシヤは丸坊主に枝をむしり取られました。皆、默つて雨風の音を聞いてゐるばかりでした。

義州郡にでも二十五人はゐる。危險ぢやないでせうか。

炊出しは厄介だなあ。――

明日は新義州へ歸られないです電燈はつきません、夕方の少し小降りの時皆歸りました。客は私ひとり――だが、何といふひどい雨風でせう。先生、お寢みなさい（八、一九）。

◈市村氏の事

平田久雄

總督府燃料研究所の市村理學士は健筆を以て聞へて居る▲技術者に不似合に文學的な美しい筆を持つて居る▲本社永樂町人が氏に『石のひとりごと』いふ鑛物學上の題材を賴んだのは、過ぐる六月の初▲ところで官用や旅行が相次ぎ、稿なかなか成らず、今度その息つぎに『鑛山漫筆』といふ一文が來た▲同稿でも解るとほり氏はその方面では眞にめづらしい隨筆家である。

京城雜筆

仇討異聞

古河鑛業京城出張所　水谷九二吉

私が無頓著に喋つた史談が前號本誌に麗々しく掲載されて居るのに尠からず恐縮し赤面しましたが、其内にあつた大石良雄に關する話は多少間違ひでした。それは私の言葉が足りなかつた爲めでせうが、兎に角古今稀に見る英邁の士大石に對し絶望的云々の文字は私として正視するに忍びませぬ。

就ては曩の史談は一應私が取消しその償ひをなす意味で標題の如く傳說異聞を書きましたから御諒承下さい。勿論私は歷史家でもなければ考證家でもなく、たゞ日頃道樂に研究して居る史實から氣付いた儘抽出し書連ねた次第で素より誤謬あらば容赦なく御敎示に預りたいと思ひます。

◇

赤穗義士神崎與五郎東下りの一席は可成り人口に膾炙された物語だ苟しくも兩刀佩いた武士が物の數にもならぬ馬子輩に足蹴にされ、散々侮辱されながらも、ならぬ勘忍するが勘忍、大事の前の小事よとヂッと腹の蟲を押へて遂には詫證文まで書くと云ふ實に稀代の隱忍振り、これこそ慥かに後世に傳ふべき逸話で講談は申すに及ばず浪花節や琵琶歌まで鳴物入りで擔ぎ廻るのも無理はない。

處が折角なことには此逸話のヒロインは神崎與五郎でなく大高源吾であることだ。

それは先年東海道大井川附近のさる舊家に其詫證文が家寶として遺されて居ることが發見されたが、之を見ると立派に大高源吾の署名があり花押もある、そこで早速同家から此趣を東京の講談師に通告し其訂正を申込んだ所、コハ一大事と講談師相集り色々文珠の智慧を絞つた擧句が振つて居る、曰く大高源吾は風流人で逸話に富むけれども神崎與五郎は講談材料に乏しい故に東下りの一段は矢張り從來の如く神崎與五郎にして置かうと。

斯うなれば神崎與五郎も愈々腰を据えて名を賣ることが出來る譯だが、然し當世人ならいざ知らず義に堅い神崎は定めし地下で苦々しく思つて居るだらう。

◇

荒木又右衞門の奉書試合も隨分持て囃された物語だ、德川三代將軍指南番柳生飛彈守が眞向に打込む眞劍を奉書紙一枚で喰止めたと云ふ此世で見られぬ實に超人的技量だ、超人的なる故に芝居にしても講談にしても見る者聽く者を唸らせること請合だが、堪らないのは飛彈守である、天下の指南番が奉書一枚で支へられたとあつては末代の名折だ。

明治の初年此物語が餘り評判高くなつて來たので當代柳生家でも捨てゝ置けず一夕さる有名な講談師を邸宅に招いて伊賀越を語らしめた。講談師餘りよい氣にもなれず奉書試合の一條を冷汗流しつゝ辯じ立てたが、講終つて後柳生當主徐ろに口を開いて、

お前は講談師だから劍道のことは解るまいが奉書一枚で眞劍を受止め得るものでない。當家に遺つて居る記錄を調べて見ると當時飛彈守が荒木又右衞門を呼び寄せ柳生家の極意である法定四本の術を試した所物の見事に之を仕遂げたとある、奉書試合と云ふのは此事を誤り傳へたのであらう。

と云つたので講談師頭を掻いて引下つたと云ふ事だ。

法定四本の術が奉書試合と變ずホンにショウが無い。

◇

時は寛永十一年十一月七日路芝に霜をおく寒い朝、處は伊賀上野町鍵屋の辻で主從四人の一團と十二人の一團とが入亂れチャン〳〵バラ〳〵時ならぬ血の雨を降らしたこれぞ片や渡邊數馬荒木又右衞門及其若黨と片や仇敵河合又五郎及其一族郎黨とであつて日本三大仇討の一と謳はれた伊賀越の本幕が開かれ譯だが、結果は河合方全滅で御大又五郎を始め八人まで斬殺され四人は戰始まると共に逃げ失

せたが（一説には死傷七人逃亡五人）、荒木方は若黨一人討死他は多少負傷したに過ぎなかつた。そこで荒木の手で斬殺されたのは何人かと云ふに敵軍の最も豪の者河合甚左衛門を始め二人とも云ひ四人とも云ふが兎に角講談で云ふ樣に三十六人でないのは事實だ。

實際問題として眞劍勝負に當り而も對手が多勢の場合に一人を斬殺すことは餘程研えた腕でなければならぬ、それを荒木の主なる力闘により、四人の寡勢で以て十二人を壓倒し勝利を得たことは慥かに驚歎に値する、三十六番斬らなくとも之で澤山だ、プレミアムを付けなくとも其價値は充分。

尙此血戰最中鍵屋の辻の酒屋の亭主が頼まれもせぬのに荒木方へ大に聲援を與へ遂には屋根へ登つて河合方へ盛んに瓦を投げ付けたと云ふ事だ、講談でよく藤堂侯が荒木方に肩を持ち鷹狩にかこ付けて其便宜を計つたと云ふのは多分此邊から出たことゝ思はれるが、事實當時の大名がそんな偏頗なことを仕やうものなら、お江戸中央政府から綱紀粛正がビシヤリと來る筈。

◇

其他傳說異聞を書き立てれば幾くらでもある。例へば岩見重太郎は全く架空の人物で薄田隼人と緣もゆかりもなかつたこと、赤埴源藏は決して酒を嗜む人でなかつたこと、あの美い清姫は宿屋の醜い後家であつたこと、お染久松は當年僅か二歲の主家の女兒を十一歲の鼻垂れ小僧久松が子守をして居る際誤つて溝川へ墜し死に到らしめたのが其出所であること等、等、等。

然し考へて見れば折角美しく咲かせたトラデイションや昔語の花を餘りムザ〳〵と引裂いたり抹殺するのは甚だ野暮の骨頂。

折柄追々秋が來る、科學萬能の秋が來る。秋になれば花は益々尠くなる道理、野暮な打花や抹殺も宜い加減に止めて筆を擱かう。

子供服の事

丁子屋商店　鈴木文次郎

◎近年子供服の流行はすばらしいもので誠に我々兒服業者は此上ない仕合で御座います。

◎然し乍らお隣の子が著てゐるから內の子供もといふ所謂流行心理に支配された流行では服裝改善の意義をなさない事だと思ひます。

◎從つてせがまれるまゝに又は可愛さに子供をつれて商店に行き、あれやこれやと選擇することは頑是ない子供に虛榮を敎へるやうなもので、子供の望むものは價が不廉でも忍んで買はれるやうな傾が御座います。

◎商賣根性から申せば一も二もなく商店で御求め下さる事をお勸め申したいのですが、之を國家經濟から考へますればなるべく否是非家庭で作つて頂きたいと思ひます

◎家庭でお仕立になれば高價な仕立賃をお拂ひになる必要がありませんから約半額位で御子樣方に似合はしいものが出來上りますもし一歩進んで御主人の御著古しなどを改造せられたならば廢物を利用せられて經濟此上ない事と思ひます。其の上親の慈愛と努力によつて作られたものは如何に貴く子供の心にうつり、それが將來どんなにつよい感化を與へる事でせう。

◎さすれば一家の經濟は勿論やがて國家の利益となり、茲に子供服流行の眞の意義があるのではなからうかと思はれます。

京城雜筆

男女の事

鎮南浦電氣會社
支配人
川本竹松

○

食慾と色慾とは、我々人間否總ての動物が有する二個の本能である幾等お上品振つて居ても此二つの本能を美化して之を充溢し滿足さすために生活するのが是れ人生である。一つは自己を保護するため他は人類存續のためである。之を體裁よく科學的に云ふと、前者を經濟生活と言ひ、後者を性慾生活又戀愛生活と言つて居る。經濟生活と云ひ又戀愛生活と云ふと、何んだか別個の生活のやうに思はるゝが決してそふでない。兩者は相離る可らざる密接な關係を持つものにて、玆に事務と性問題の起る譯である。

○

『君と寢ようか五千石取ろうか、何の五千石、君と寢よ』斯んな人にかかつては、經濟生活は何等の價値もない。又『金に親子はない』と云ふ實利主義の人に至つては勿論夫婦關係も淡白である。アノ傳右衛門さんのやうなお方ときては、戀愛生活は同等意義を有せない者と思ふ。單に金に活き又單に性に活きることは人生に於ける變態生活であつて我々普通人の學ぶべき所でない。勿論多情多感の我々なれば時と場合に依つてさういふ變態心理を惹き起す者なるも、複雜なる浮世の義理や人情にからめられて、いつしか正道に立歸り矢張り二つの本能を遂ふて喘ぎ行く者である。鬼角金と云へば色氣がない、色と云へば金氣がない『色男金と力はなかりけり』で全く利害相反するやうであるが、之を適度に融合調和してこそ眞に意義ある生活と云ふ者である。價値ある人生と云ふ者である。

○

古來英雄色を好むと云ふが豈唯英雄のみならんや、苟も人間たる以上は誰れしも此道を好むものなるが、併し其人の國家或は社會に對する交渉接觸の深淺厚薄に比例して好色にも自ら深淺厚薄の差あり即ち國家社會に活動する程度の大小强弱に依つて好色の大小强弱が定まるものであると云つて差し支へはない。と言ふのは斯る活動家は一身一家を國家社會に獻げて日夜奔走する者故、我々普通人のやうに家庭的團欒の快樂を味ふ機會尠きため自然到る所に於て異性美を味つて自己の本能を充たすと共に、其勞を慰むる者である。又閑人色を好むと云ふが夫れに對する理由を知るに苦しむ。若夫れ働かざる者は食ふ可らずとの勞働原則を情界に適用するとせば彼等は當然禁慾の慘狀に陷るべし。

○

次に我々事務員如何と云ふに矢張り人並の色氣はある。たまには意氣な妓のつまびきで一杯やりたくなるが、それをやれば忽ち自己の保護慾なる食慾の充足に影響するを如何せん。薄乎とした眼付で戀人の笑顔を夢みては自然事務の滯滯となり結局昇給にも遲れ、惡く行けばお拂箱ともなり、同時に金の切目が縁の切目で可愛い人に愛想をつかされて所謂泣き面に蜂、後悔してもモウ駄目である。そこで我々は不本意ながら經濟と戀愛とを二つ併行させて一方に片寄らないやうにするか又は交互に衝動刺激して兩者相待つて之を發達せしむることが肝要である。

○

元來我々の經濟生活の基礎たる業務は自己を中心としたる對社會的行爲にして社會を離れて存立するものでない。然るに性慾生活は不社會的行爲にして米田博士の所謂『排他的二人關係』であるが故、性慾本能の充溢と滿足を以て人生の究竟目的とする彼の快樂主義のみにては到底社會を根據とする經濟生活と調和融合するものでない事は明白である。さりながら經濟生活の充溢は自然性慾生活の發展となり又性慾生活の衝動と其滿足は自然經濟生活に大なる刺激を與ふが故、我々の執務上に多大の影響あることは何人も實驗する所であると思ふ。例へば夫婦喧嘩して出勤した場合には何んとなう事務が捗らないが、妻の動作がいやに優しく其の愛らしい姿が一種の衝動を與へたる其日は殆んど別人の如き態度を以てハキ〳〵と仕事が出來る、此事實は確に排他的二人關係が公的職務に甚大なる關係あることを證するものと云はざるを得ない。

○

されば家庭に於ける妻の行爲は其良人の職務の上に直接又間接に多大の關係ある者なるが故、妻たる

京城雜筆

ものは不斷良人の精神上にも將た又肉體上にも新しき力强き或る衝動と刺激を與へる爲め華やかな風姿と優しき態度を持ち、飛付かんばかりの愛想よき言葉を使ひ、いつも結婚當時の心持を以て良人に對する事が大切である。之れが即ち良人の職務を理解する意味にもならうと思ふ。世話女房の糠味噌臭きに至つては實際愛想が盡きて時には變つた四畳半へ行きたくなるは我々の常である。

○

蓋し戀愛生活とは單なる肉的性交の滿足のみを意味するものでない接吻や抱擁は素より其他話振り、身振り、髮、形に至る外形美は勿論其外學問、智慧、淑德、美術思想などの如き幾多の精神的要素が含まれて之等總ての要素を適宜に調和融合案配して日夜變化表現する所に戀愛生活の眞價を認むる譯である。されば幾等美しき女でも頭の働きなきものは共に戀を語るに足らぬ者であつて、斯かる女は只性交のみに活くる單なる快樂の機械たるに過ぎざるを以て、其戀愛は決して永續せず、いつしか秋の扇と捨てらるゝなり。又金ある人の金が取り持つ美しき女との性交は、妻なき人の自瀆行爲にひとしきもので、彼等は之れに依りて只肉の滿足を得たりとするも、實は精神的に何等戀愛に觸れざる憫むべき行爲である。彼等は徒らに經濟生活の權威を以て弱き女性を征服せんと企つる者なるも、流石斯の道に長ずる女性の對策巧妙にて捕虜と見せかけ却つて敵を捕虜にする所興味あり。兎角女性は『振ること』を好まぬやうなり。金特振ること、色男振ること、利巧振ること、などは女性に對しては何等價値なきようなり。世に金持の案外女にもてぬ譯は茲に存せざるや敢て金持の反省を望む。

○

昔から嬶と疊は新しきがよしと言ふが之れは正しく男の心情を道破したる至言である。だから妻たるものは此邊の呼吸を充分呑込んで不斷良人の戀情を煽つて常に變化ある新しき衝動を與へるやう心掛けねばならぬ。又良人たるもの經濟生活の保證者たる故を以て濫りに其權威を振舞ふことなく寧ろ妻の優しき心得に同情して身も魂も彼に捧げて決してあだし女に觸れてはならぬ。それは戀愛は男女兩性間に燃ゆる一種の生命であるから之れを妻にのみ强ゆべきものでなく、當然兩名によつて愛護すべきものである。斯くして性交享樂なる元始的本能より漸次教養進化せしめて終に近世戀愛學者の唱道する所謂『靈肉合致の人格的心境』にまで發育向上せしむるやう相互大に努力することが肝要である。之を爲すは詰り良人をして益々其經濟生活に活躍せしめ、妻をして益々其美を發揮せしむる唯一の道であると信ずるものである。

元山にて歌へる

經濟協會　眞鍋康

◎

元山の海の靑さよ海をかこむ山の靑さよ晝の色濃し

◎

茫洋と日本海につらなれる永興灣に白雲うかぶ

◎

乘りいでし永興灣の靑波のしぶきを浴てボートを漕げり

◎

息强く堪て泳げば波のうねりづんづと胸にぶつかり來る

◎

泳ぎでし濱の日盛り灰色の燒けたる砂は足を刺すなり

◎

ほの匂ふ潮のしめりの肌にしみまたゝくかはく心よき風

◎

海にそふ松原つづき木かくれの貸別莊にものほしてあり

◎

誠よく日本語使ふ松濤園のロシヤ人の女給鼎弄ひてみる

滿洲の夏旅

奉天　廣江澤次郎

室内温度九十五度！、大袈裟の樣だが汗瀧の如く流れ出る八月五日午後三時十分、浪速通の事務所を飛出し、奉天驛へ飛ばし著け、三時三十分長春行の列車に飛乘つた。イヤハヤ車中の暑さ百度を越し、扇風機が三ヶ所で活動して居るが寸効ない、禪の文句じゃないが心頭を滅却すれば火も猶涼し？、抵抗避暑旅行と思へば我慢も出來る今日は長春と公主嶺の中間大驛たる范家屯迄行くのである、東道の主人公は同地の商人田先生である田君は酒も呑まず阿片も吸はず煙草も手にせず女も買はぬ支那人としては稀に見る道德堅固な男である、彼は在理（ツァイリー）である、在理（ツァイリー）の信者は皆道德堅固である、密かに磐若湯などを頂戴する御連中よりは遙かに上品である、在理（ツァイリー）は決して本尊を他人に話さんが觀音さまらしい、丁度西洋の清教徒の樣な者？田君は當年三十八歳、京奉鐵路沿線昌黎の產れである、父母既に亡く故郷には祖父と第一夫人のみである、范家屯には第二夫人が居り田君は糧棧（穀物問屋）を經營して居る、私が『在理でも第二夫人を置いゝのか』と問へば田君一層眞面目な顏して『支那には早婚の弊習あり大部分姉女房です私も御多分に洩れず第一夫人は二ッ年上の四十歳です、而も未だ子供がありませぬ支那の規則として妻冊歳となり子なき時は當然第二夫人を貰くのです、私は第二夫人を得今は二人の父です』と眼を細ふして吹聽に及ぶ、田君は眞面目な可愛い人だ。

× × ×

汽車中で矢鱈に知友に逢ふ、今日も食堂車で偶然愉快な伊太利青年ブタッロ君に會つた、彼は流暢ではないが能く英語を語る、私はお蔭で窓外只見る高粱畑と百度の炎熱を彼との快談で忘れる事が出來た。

彼は彼の純眞な態度が示す如く羅馬の素封家の子息で當年二十六歳である彼の伯父と從兄は豪商で餘程の名望家らしい。

歐洲戰亂は全歐羅巴を火中に投じ遂に伊太利も參戰した熱血詩人ダヌンチオも戰線に立つに至つた、當年十八歳青春の血に燃ゆるブタッロ君も祖國の興廢此一擧に在りと許りに奮然出征し、各地に轉戰奇功を奏したのである、彼は彼の誇である數個の勳章を私が知らぬのを頗る遺憾として居るらしい。

烱眼なる彼は世界的商戰は今後支那を中心とすると睨み凱旋匆々視察の爲め上海に來た、彼の決心は益々堅くなり伯父や從兄と打合せの爲め一應本國に歸り更に渡支、先年先づ滿洲の新天地に一石を投じたのである。伊太利の商品は何でも最低値段で仕入る特約があるらしい、伊太利商品の販路開拓を頻りに私に慫慂するのである。

【一六】

彼は未だ獨身であるが若いに似ず品行も善いようである、彼は今溫柔鄉のハルビン、遊野郎の樂園であるあのハルビンに居るが餘り五色酒にも醉はぬらしい、私が妻帶論をやると彼は肩を聳かして未だ早いと否定する、デモ婚約はしてあるだろうと突込めばウブな彼は顏に紅葉を散らし羞かしさうに首を縮める、愉快な未賴母しい青年である。

范家屯驛へ著いたのは晩の八時半であつた、ブタッロ君には固き握手の後別れ、私は田君の宅で晩餐の御馳走になり支那が生んだ世界的遊戲である麻雀（マージャン）をやり十一時半頃淡き旅路の夢を結んだ。

× × ×

翌朝八時半の急行で公主嶺に戻り直に十二清里奥の田舍へ行つた、此日無風、炎帝猛威を逞うし大いに惱ます、凸凹の街道を汗ダク〳〵進む、各所に點在する村落から私共を迂散臭く眺める村民は殆んど原始時代の人類の樣だ、此世界に齒磨揚子のあることを知らぬらしい、此奴馬賊を副業として居るなと想はれる程獰猛な面構への也居る、眉毛の如き三ヶ月樣を上向けた樣な奴も居る、眞瓜を皮ごとウマさうに立喰して居る、路傍に咲く可憐な野菊を罪もなきに踏躪る彼等に文化とか藝術とか云ふ字義を解さしむるにも百年は要するであろう、支那には覺醒した驚くべき進歩的青年も多いが、日本と露西亞の勢力が交錯し國際的刺戟の强烈な筈の此邊にも太古の民が居る。途中鄙に稀な立派な關帝廟があつた、參拜と云ふと殊勝な心懸けの樣だが面白半分に飛込んだ、驚くべき立派さである最近の修理造營と見へ十數の偶像厚化粧

京城雜筆

して御坐る、淨財を寄附した善男善女の芳名が目白押しに『流芳千古』とか『永垂不朽』とか銘打つた板に書連ねてある、支那人は仲々名文句を考へるが一つ訂正して貰いたい一事がある、夫れはホテルの事を飯店と云ふが、私は甚だ不風流と思ふ『北京飯店』『六國飯店』の如し、私共は飯店と云へば朝鮮の飯家や內地の一膳飯屋を連想して不快である、一流の料理店亦飯店と稱す、奉天の公記飯店志記飯店の如し何とか風流な名稱がありませんかな、京城ならば千代本飯店、花月飯店、仁川なら鱗飯店、八阪飯店とでも云ふべき乎時計はドン〳〵進む、腹は減る、猛烈に暑さ加はる、農園の實地踏査もソコ〳〵に引返し公主嶺へ著いたのが午後三時、室內溫度九十八度、イキナリ風呂場へ飛込み水スツ被りてヤレ〳〵と横になれば蒼蠅雲集！旅館の入口に蠅除けの網戸があり各部屋の入口に亦網戸があつても浸入し、殺せども〳〵十數疋は翔け廻つて旅の疲れを休まして呉れない、咄公主嶺の蒼蠅奴！。

何所へ行つても日本人の不況談に引替へ底力の強きは支那商人である、此邊の特產商即ち糧穀は少なくも五萬九、有力なのは五十萬元位の現ナマを各自用意し、秋頃から活動を始め、翌年初夏の頃迄に手仕舞し、投資に對し二三割の純利益を擧げ涼しい顏して居る、田舍の百姓を嗤つた私は支那商人の堅實と勤勉と商才に富む偉大な點に感服せざるを得なかつた。

私は其夜公主嶺發、翌早朝奉天へ歸つた、シヤツは汗で重くなつて居り、身體は汗と塵の混合液を塗つたやう、早速風呂へ這入つて蘇生する、此風呂の價眞に千金？。

人間萬事是相場

京取仲買人　新田耕市

○

世に相場師の運命程變り易いものはない、其順運を迎ふるや其富將に王侯を凌がんとするものあると共に、一朝逆運に際會するや忽ちにして貧者の列に入り、而も尙多大の借金を背負はねばならぬ時も稀でない。

○

此故に相場師の事を一夜大盡、一夜乞食と言つて居る、其れ程相場師の運命は激變性に富んで居るので、氣の弱い人々が久しく此社會の仕事に從事し得ないのは洵に無理のない次第である、東北の富豪本間家堅く相場に關係する事を子々孫々迄禁じて居るのも一面の眞理である。

○

されど人間社會に於ける運命の豹變は獨り相場師に於て激しいばかりでなく、あらゆる人類は皆な其れ〳〵猛烈な運命の波浪に揉まれて或は思ひも依らぬ功名富貴を負はされたり、或は意外の不幸や悲慘の谷底に蹴落されたりする實例は少くないであらう。

○

往年我帝國の軍事的に發展した時軍人は實に素晴らしい榮譽と實權とを負うて居たが、昨年來軍縮の結果多數の軍人は馘首せられて就職に迷はねばならなくなつて居る又時の政友會總裁として天下の權勢を揮つた原さんも一書生の兇刃に驛頭の露と消へたぢやないか。

○

更に獨逸の苦慘、カイゼルの末路は如何に露西亞の激變、ザーの終りや又如何に、有爲轉變の世とは云へ人間萬事是れ相場師か。

○

其他確實の商賣が必ずしも確實ならず、不安な職業亦必らずしも常に不安でない、されば表面から見て危險な相場師も茲に定住して見ればソウ不安なものでもあるまい。

○

想ふに人間社會の現象は悉く相場と同じ運命に弄ばれて行くもので人間萬事塞翁が馬と言はれて居る通り眞の安定や不變の樂土は存するものでない、而して相場師の境遇が常に一喜一憂、如何にも變化に富み不安に思はれる所に發刺たる興味が湧き、其所に相場師の本領が發揮されるものたるを思はねばならぬ。

◈木村屋主人

平田久雄

木村屋の餡パンといへば、京城の街の隅々まで、それこそ三歲の子供まで知つて居る▲その木村屋の主人を田中さんといひ、あまり世間に顏は出さぬが、歌俳の嗜みふかい人として知られて居る▲本號には氏の金剛山行十數百を、やつとのことで貰ひ、之を第三十五頁に掲げて居る。

財經漫筆

銀賣買の話

安取監査役　中村巖

一、能く動く銀相場

滿洲へ行くと到る所で銀で儲けた損をしたといふ話を聞く。それ程に銀の賣買は普及してゐる。又滿洲の主なる商業都市には必ず銀市場の設備を見る。蓋し貿易の行はるゝ所必ず金銀賣買を伴ふからである。安東縣の如きは支那側に現物市場があり日本側に定期市場がある。

定期市場は本年上半期に於て一日能く百五十萬兩の平均出來高を示した。百萬圓の金は之を京取株に換算して四萬株を超ゆる。安東で日々京取株四萬株に匹敵する取引がある譯だとすれば盛況想ふ可しではないか。

銀賣買を邦人から見れば銀塊の賣買であるが支那人から見れば銀塊を以てする日本金紙幣の賣買である。此點は特に注目に値する。

一、兎に角この銀相場は日夜によく動く
一、地方貿易の關係で動く。
一、各地との爲替關係で動く。
一、地場の仕手關係で動く。
一、東三省の政策で動く。
一、上海の金融事情で動く。
一、日本爲替相場に伴れて動く
一、倫敦銀塊相場で動く。
一、米價で動く。
一、豆粕で動く。

何んで動く彼んで動くと數へ來れば際限もないが實に敏感であり能動的であり長息惑にも向くが小掬ひには更に打つて付けの代物である。

二、支那人の金賣買

日本の金紙幣は滿洲でよく流通して居る。

支那人は此れを日本金票と稱し又は老頭兒票と呼び信用して受授する。併し被等の社會は決して日本の金票を用ひて價値の標準とは爲さない。又之を用ひて富の蓄積を爲さうとはしない。故に日本の金票は大量取引の建値に用ひ難い。貸借勘定に用ひ難い。預金の吸收も株式の募集も金を以てしては六ケ敷い。この傾向は單に日本の金票のみを忌むのではない。何國の金票でも金貨でも亦然りである。この事實は彼等の社會が銀本位の貨幣經濟に立脚してゐることに思ひ到れば直ちに諒解し得る。彼等は去年の一塊の銀が今年も一塊の銀であり得る限りその一塊の銀に依つて表現された社會的交換價値をも全く同一量のものとしてゐるそれは丁度吾々金貨國の者が純金一匁を以て通貨金五圓と定められてより以降去年の五圓と今年の五圓には何の變化も在り得ないと信じ切つてゐるのと少しも變りはない。

斯樣な譯であるから支那人は日本金票を手にすれば必ず直ちに自國貨幣に換へて置く。日本から綿糸布雜貨等を仕入れた時には其の代金支拂の時期まで金票先物の買約定を建てゝ金價の變動に備える。

三、支那人の銀賣買

支那人が日本金紙幣を賣買せねばならぬ理由は恰も吾々が支那貨幣を賣買せねばならぬ理由と裏表である。互に立場を換えて考へて見れば尤も至極と言はねばならぬ。今一例を擧げて考へて見たい。

邦商が鹽魚昆布等を支那人に賣つて銀貨又は銀錠を受取つたとする所が銀の相場は時々刻々と動搖して止む時なしだから銀を賣つて金にせぬ内は損得のきまりがつかない。銀をふところにして氣懸りなと思へば銀を賣り遲れて損をした實例が頭の中を往來する。そこで成行賣りと遣つて漸く安心をするこれは銀を賣る場合の例であるが次には銀を買ふ場合の例を擧げて見やう。

例えば東京深川の市場に豆粕の先物を賣つて安東を買付けたと假定する。

先づ今日の銀相場を一圓七十八錢として豆粕壹千枚の相場が壹千百兩ならば一枚は一圓九十五錢八厘これに運賃諸掛りを加算して東京渡し二圓何程につく。依つて一枚三錢儲かるといふ位の算盤でポント手を打つたとする。明朝銀が飛上つて一圓八十二錢と來れば原價一枚二圓二厘につくから三錢の儲けは飛去つて尚其上に一錢四厘の穴が明く。斯る危險を免れやうと

すれば一方に東京市場の商内を決めると同時に他方に銀の手當をせねばならない。然るに銀の現物は從來朝市に限られてゐるから先以て定期市場に買驚ぎを立て次で現銀を手に入れたら定期をはづすといふ順序である。

柞蠶絲の貿易も木材も大豆も油も雜穀も大體右の如き關係で銀の賣買を伴ふ。

それ程必要欲ぐことの出來ない銀なれば前以て先づ銀を買付け然る後に物資の買付けを爲さばよいではないかと言ふ說がある。これは永久銀資金を有つと言ふ段取があるか若くは相場は目先き高いに極まつてゐるといふ確信のある人でなければ實行し得ない。何となれば銀相場ほど氣まぐれに動くものはないと信じられてゐるからだ。

四、銀票と銀錠

一概に銀といつても所變れば品變るで決して各地一樣ではない。東三省の本位貨と目すべきものは東三省銀行の大洋銀票——一圓銀の兌換券——なるも目下は制限兌換なれば定價よりも遙に安い市價を附せられてゐる。斯る紙幣では貿易の決濟には用ひ難い。それで實質貨幣たる銀錠を用ゆる。その銀錠を元寶銀と稱するが、元寶も地方によつて品位量目を同じうせず從つて地方的名稱を設けて之を區別して居る。上海は曹平銀、規之銀。天津では公砝平、化平。芝罘の曹平、營口の營平、安東縣の鎭平など何れも地方的名稱の由來を秤器の區別に置く。鎭平銀とは安東の舊稱鎭口の秤卽ち鎭平といふ意味。

十連は正金銀行發行の銀券が代表的通貨として流通する之を鈔票と呼ぶ。

銀錠は一個の重量が五十三兩內外、日本秤にて四百八九十匁。其の形狀馬蹄に似たるより馬蹄銀の稱あり以前は安東にも銀爐の存するありて他所の元寶銀は悉く安東の標準銀に等しきやう改鑄したるも近年は主として上海の元寶銀を其儘用ゆることとし單に品位を檢査し量目を畫直して鎭平銀に充つる。

スズキと麥酒

朝鮮信託常務　桑野健治

△

仁川に住む程の者が沖釣りの妙味を解しないでは折角仁川に住む甲斐が無いと云ふものサとそれ程大袈裟に云ふほどの事もないが、兎に角、よく沖釣りに出かける友人にオー君と云ふがある。

△

然し獲物は何時も餘り多かつた試しが無く、空の魚籃を提げて戻る事さえも間々ある、デロの惡いのが混つ返すと、

『なアに、元々魚釣りが目的では無いサ、好い空氣を吸つて一日の靜養にさえなればマア足れりさ』

と顎をなでる。

△

其のくせ矢張釣れた方が好いと見えて、愈々沖釣りの前日となるとヤレ汐加減が善いとか惡いとか、下手な料理人が吸物をこしらえる樣な事を云つて、道具の手入れにいそがしい。

△

此オー君、一日例の通り沖釣りに出かけたが、何如なる間違にやスズキの二尺許りなるを引提げ、意氣揚々として歸つて來たが、其鼻息や當る可らず。

『己れの腕前はザットこんなものだ』

と計り胸を叩いてそりくり反つた

△

此熊を見せつけられた惡友共ワット云つて一時は恐入つたが、サテ熟々考へて見ると腑に落ちぬ點ばかり。

デ從來の統計に依る時は到底解釋する事能はざる此一大獲物は忽ち友人間の一話題となり、ハテ眉唾ものだと計り疑心が動く。

△

ソコデ物好きなのが內々、穩密を發して、當日の模樣を隈なく探くつたところ、此處に端なくも問題のスズキはビール三本と物々交換の結果獲得したものだと云ふ事が判明した。

△

それ見ろ、スズキの釣れる柄では無い、何うもお可笑いと思つたよ——と云つたものの彼の時の自慢面が癪にさわる、一層の事スッパ抜いてやれと衆議一決。

△

丁度折よく來合したのを引捕えて『オー君、此頃は麥酒でスズキの曲釣りが流行るぜ』

と眞甲から一刀あびせると、麥酒で釣つたと云ふ臉は爭はれず、

『ウム……』

と唸つて泡を吹いた。

知事と禪師

京城日報社　河西青莟

京畿道知事時實さんが、總督府監察官としての時代及ひ現在の知事時代に於て隨時隨所になした講演を蒐めて、『京城三年』と題する一册子を編んだ。卷頭には秘藏せられる遂翁和尙筆寒山拾得對幅の寫眞を揭げ、其の序文に此の幅の來歷が書かれて居る。近來感動の文字であるが、元來『京城三年』は京畿道關係の官衙吏員にのみ頒布される册子である爲め、惜むらくは此の文字にして弘く世に讀まれず仕舞ひになりはせぬか。それも先づ可として、それよりも此の序文中に時實さんの一面が躍如として居ると信ずるので、時實さんを語るかわりに、是を拔いて見たいと思ふ。序に言ふ。

× × ×

東京白山道場に於ける私の學生生活の最後二箇年半は、今迄の生活中、極めて興味あるものであつた白山道場は一代の巨匠渡邊南隱禪師の住寺であつた。而かも道場の建設功勞者として、同時に禪師の補佐役として天地古鑑師は近頃に珍らしい脫俗の士であつた。二箇年半私は同師と日夕相親しむだものである、其の當時、師が信州の自分の得度寺から遂翁和尙の寒山拾得の双幅物を持つて來て、隣寮に掛けて居られた。遂翁和尙は云ふ迄もなく、白隱門下の神足で、大器遂翁と稱せられた人、畵は大雅堂の流を汲むで居ると云はれて居る。寒山拾得は、之を其の儘實在の人とすれば、所謂隱士で、我々として其の全人格を模範にすることは出來ぬかも知れぬが、少くも一服の淸凉劑たる風格の所有主である。其の幅を貰ひたいと申込むだのは、單純な骨董趣味からでは勿論なかつたのである。天地師は外に約束があるから遣れぬと答へられた、然し思ひ直して、自分が死ぬ前に、君が知事になつたら遣つてもよいと云はれた。間もなく學校を出て、知事になる準備に取掛つた。其の後十年の間度々出會ふたが、まだ約束の資格が出來ぬので、催促する權利もなく、話もせなんだ。計らずも大正八年に朝鮮へ來ることになつて、何うやら約束の資格丈は出來た。朝鮮へ出發のときにも、勿論會ふたが、其の話はせなんだ、更に上京して會ふたが、催促はせず話もなかつた。一向約束の履行されそうな模樣も見えなんだ。其の內に師は永い病氣で、遂に一昨大正十一年の十一月、此の世を去られた、久しい間の恩人に別れて、悲しみに堪へなんだが、公務を有つて居る身のこととて、會葬も出來なんだ。年改つた一月二日、白山道場から小包郵便が屆いた。開いて見ると豫て約束の軸物である。遺品天地古鑑も故人の自筆で、尙心經一卷を添へてあつた。云ふ迄もなく、師が生前其の手配をして置かれたものである。自分は何とも云へぬ感に打たれた、今更此の事實に對して說明はすまい。其の瞬間の感も分析せずに置かう。只故人の面影を偲ぶ何よりの形見と、今珍藏して居る、卷頭に寫眞版にして揭げたのが即ちそれである。師は固より恬淡の士で、別に道樂と云ふてはなかつた。朝早く起きて寺內を掃除する、朝飯が濟むと、袋を掛けて市中へ出て行かれる、晩方ぶらりと歸つて來る、之が日課であつた。酒は嫌ではなくて、よく相手をした。御機嫌がよくなると君折角此處に居るのだから、何か足跡を殘して行かねばならぬぞと云ふて居られた。成程何か紀念を殘さねばなるまいと思ふて居つた其の後早十幾年の星霜を經た、然し實は未だ何等殘りさうな足跡も署かぬ。師は恐らく仕方のない人間と思ふて居られるであらう。自分も慚愧に堪へぬ。只故人の當時の言葉は何時も忘れぬ、遺愛の幅を見ると一層感慨が深い。實は面目ないことであるが、只心丈は大に遣る積で居るから、せめては赦して戴きたい。今後とも其の言葉に副ふ樣に、一段努力したいと思ふ。京城へ來て、初の二年は總督府の監察官として、後の一年は京畿道の知事として、今日迄丁度三年になる。（中略）無論閑葛藤、滓妄想が多からう。師が之を見られたならば、何う云はれるであらう。つまらぬものと笑はれるかも知れぬ、或は叱られるかも知れぬ然し世間では又之が藥になることもあらう、何と評せられるか、見えるなら見て貰ひたい氣もする。寫眞を揭げたり其の來歷を書付けるのは其の心持から出發したものである。と。

京城雜筆

財界春秋

和田一郎君

京城日日新聞社　別府西海

◎奥行きの深淺については見る人によつて異見もあらう。然しその間口の廣い事に於て法博和田一郎君の如きを記者は他に知らない、漢詩とか和歌とか川柳とか俳句とが童謡とか云つたものには、大抵その向き〳〵があつて、あれにもこれにも手を出し得る人は少ないやうだ、然も和田君は左樣な餘技に對してさへ何でもゴザレであるそれに君にはこれらをものするに當り、苦渋とか、難題とかいふものがないらしい、宛ら流水の如くサラ〳〵と片付ける。

◎君は三十九年に帝大の法科を出で、大學院に留まり、財政學を專攻した法學士だ、然もその現在の法博の學位は朝鮮の土地制度といふ論文によつて得てゐる、木によつて魚を獲たといふのは當るまい然し乍らその名譽の法博は專門に稍緣の遠い研究の結果と見てもお叱りを受くる程のとはなからうと思ふ、君の昔の『朝鮮の匂ひ』や折々新聞や雜誌などに見る君の筆をとほすと、君は專門と可なりかけ放れた文學者詩人肌を多分にもつてゐる、かと思ふと宗教殊に佛教に對しては一家見を具へ、稍深い所まで思索をめぐらしてゐるらしい、酒もよく飲む、眞僞は知らず艶聞もある、以て君の廣い間口の一面を見得るであらう。

◎東京のある旗亭で鮮銀の鈴木君火災保險の河内山君、それに和田君が去年であつたか會合した、その席上侍れる妓に三君の年をあてさせたら、十歳近くも多い鈴木君を無髯でハイカラの故か最も若しとし、最も若い和田君を老人扱ひしたとて、君の憤慨甚しかつたとの事である。かかるは君が常に多感多情且つ思ひを多方面に働らかしてゐるために、自然頭髪もゴマ鹽となり、その面相にも老成の風を現はすに至つたのだらうかとも考へられる、と云つて君は、尊大ぶる人では斷じてない、自然と來るのか、又は努めた結果か、人に對してはニコ〳〵然として第一印象に快感を與ゆるトクな人であるホン先月まで在官し、勅任の肩書を永くくつつけてゐたが、高くとまるとか、官僚氣分に富むとか云ふ事は君に於て見出されぬ。

◎君は越後の人である、官吏としては大藏省の地方並に中央にゐた朝鮮に來たのは、土地調査事業創始の際、現在の内相當時の大藏次官たりし若槻禮次郎君の推薦を受けたからだつた、在鮮官吏としての半ばを君は土地調査事業の完成に捧げてゐる、大正七年度支部の事務官に轉じ翌年鐵道部長となり勅參を經て朝鮮の大世帶を握る財務局長たるに至つた、官海に於けるその行徑は順調であり、高等官一等に進んで、先づ役人が嶽に登り盡した形だ、今回退官して銀行畑に移つたのは好潮時と見てよからう。

◎官吏としての君の功績は何と云つても、各般行政の根基となる土地調査事業の元締後たりしにあらう、土地調査創始と殆んど同時より總務課長たり、その終了まで同じ椅子に居た、局長を送迎し又同僚に多くの異動を見た、然も君のみは終始動かなかつた、寧ろ動かせず、動き得ない程肝腎な仕事を握つてゐたともとれる、尤もその時代の收穫が君に法學博士の肩書をつけさしたのだ、朝鮮土地制度の沿革なる博士論文はその調査局時代に收めた材料によつて筆を進めたのである、それは兎に角、土地調査の實際的智識は恐らく本邦に於ても君は有數の人であらう、鐵道部長として、勅參としては大きく殘つたものを知らぬ、財務局長として、君が河内山君から朝鮮の大世帶を引受けて以來、財界は戰後の不況時に沈淪してゐた、その間君は好況時代に膨脹した半島財政の整理について無于考慮したか、今日その實績はこれ亦多く見られない、河内山君時代に膨脹した大世帶を兎に角今日まで張り續けて來たと云ふだけに盡きるかも知れぬ、唯一と見るべき新施設、稅務機關の獨立は豫算は通つたものの時利あらずで無期延期となつた、これは君の一つの心殘りであらう。

◎商業銀行頭取としての君はどうか、之れは今日に於て論ずるのは無理であらう、然し適く所として相當に可ならざるなき君の事とて相當にやつてのけやう、尤も大きい圖拔けた銀行家としての君を見る事は或は困難かも知れぬ。

雜誌『婦人くらぶ』

創刊前後のこと

朝鮮警察婦人倶樂部主幹　田村直一

私が朝鮮警察新聞社を退いて今の事業を起したのは、過ぐる十月の中頃である。私は體中の智慧を絞り出して趣意書の樣なものを作つて、先づ當路の大官に諒解を求めたが、何れも案ずるよりは生むが易いで、トン〳〵拍子に進行したそれで凡ゆる方面に此の計畫を發表すると同時に贊助を乞ふた。

是れもトン〳〵拍子で意外な所から意外の人物が飛び出して汗みどろになつて援助して呉れる。

何處へ行つても確乎遺れ、君の成功を祈る、色々と力を添へて下さるゝ中には、自分の經驗談や種々なる例を引いて親切に指導して下さる、私は唯感激の裡に著々と事業を進めて行つた。

其の眞つ最中のことである、私の家の玄關先きで少し横に寄つた處へ足の長い蜂が巣を造り始めたのである、私は物騷な奴に見込まれたものだと思つたが。

別に危害も加へねば、出入の邪魔にもならぬので其儘にして打ち遣つて置いた、初めの内は僅か五六疋でせつと働いて、貳錢銅貨大の巣を造りかけて居つたのであつたが、恰度私の雜誌の創刊號の編輯で、四五日の間、蜂の巣を見る隙もなかつたのであつたが。

編輯を了へて或日の事蜂の巣を覗いて見れば、五六疋であつた等の蜂は十疋餘りになつて居て、而かも直經三寸餘もある立派な巣を完成して居る、室の數も約四五十位造つてある、中で半分以上は子供の部屋だ。

それでも未だ室が足りないと見へて毎日幾つかの室を造り足して居る、完成した室の中には、可愛い子供がネンネさしてある。

何と云ふいぢらしいことであらうそして親蜂の此の炎熱にも屈せずセッセと努力を續けて居る態は、私は一種謂ふ可の出來ない感興が湧いて來ました。

と同時に暑い〳〵と云つてあまり努力しなかつたことが何んとなく此の蜂に對して恥かしくなつて來たのである。

そうだ、俺は事業を始めて未だ完成して居ないのだ、漸く編輯を了へただけで、肩の荷をおろした積りでゐるが、未だ〳〵俺の仕事は海の物とも山の物ともつかぬ。

暑いなんか云つて屁古垂れて居る時ではないのだ、銷夏の方法は働くに限る、馬車馬のやうになつて働いて行つたなれば、やがては、此の蜂の樣に、何時ともなしに完成する事が出來るのであらう。と氣が付いた、それで俄かに又活動を始めて一切の準備を整へて了つたのである。

而かも自分一人で、恐ろしいほど働いた積りだ、そうなれば事實暑いとか寒いとか云つてゐる隙はなかつたのである。

足長蜂に刺戟を與へられた私は、もう雜誌の發行も明日か明後日かと云ふ或る晩の事、或る親友を訪れて例の蜂の巣の一件を物語つた平常から少々迷信臭い事を云つて居る彼は何思ひけん、ハタと横手を打つた、そして曰く、

しめたッ！、貴樣成功するぞつ、由來蜂が巣喰ふ家は繁昌するに極つて居るのだ、其の例は斯ふだと色々好い例ばかりを引いて話して呉れる、私もマンザラ悪い氣持ちはしない。

或は彼が私の爲めに聲援の意味で大に激勵する手段であつたかも知れぬが、何れにしても、我が事の樣に悦んで呉れる彼の態度は私には非常に嬉しかつたのである。

翌日私は蜂の巣の周圍にある邪魔物を取り拂つて、尚近所の餓鬼大將に煎餅の贈賄で妥協をし、蜂の巣の安全を計つた。

其晩彼は、二三の友人等と共に、ビールやウヰスキーの瓶を澤山持つて私の家へ來た。

オイ、我々は貴樣の前途を祝福するぞつ、今夜は大に祝盃を擧げやう、酒は持つて來た、肴を準備しろつ、家内が俄か造りの手料理で友人達は、サモ心地よささうに咽喉を鳴らして飲んだ、私は此の溫き友情の祝の酒を、熱い〳〵感謝の涙と共に心行くまで飲んたのである。

◇伊藤氏新著

平田久雄

伊藤判事の法窟秘語が出版されたおもしろくつて多くの善い暗示を有つて居る、弘く世に行はれることを希望する。

喧々錄

書肆謙々堂　工藤重雄

○君子は天を惧れる、天を惧れざるの國民は亡びる、そんな事は舊式な老人の囈語と思つて居ると大間違、因果歴然蓬一本でもゴマカスことは出來ぬ、周易全編はこの因果の過程を面白く說いた豫言書だ、筮竹を案じなくとも之を繙けば、即ち日本人の採るべき道を明白に記してある、當節日本人は反覆易を讀んで愼しむべき秋が到來して居ると思ふ。

○法律上の因果關係以外に、物理上の因果關係以外に、尙一層偉大なる恐る可べき因果の大法が徹上徹下流行して居ることを知る必要がある、この因果の大法を西人稱して神の攝理と謂ひ、佛家稱して輪廻と謂ひ、禪家は特にこの道理を悟らしむる爲めに嗔拳熱喝、血涙滴々の修行をさせる、儒家は之を天と稱する、因果歴然と云ふ代りに天行健なりと言ふ。

○昨年九月帝都の大震災はあれは正しく天譴であつた、然るに心なき國民は偶然の天災として國民生活の度を過ぎたる贅澤の結果たるを省みなかつた、一時的の粗衣粗食は期月ならずして從前に倍する放逸生活に復歸した、別の言葉を以て言へば國民は神樣の攝理を無視した、因果を晦ましうとした天命に服從しなかつた、天譴は再び來なければならぬ。

○果然旱蝗が來た、旱天に雲霓を望むが如しとは書物に見えたが愈々事實となつて現はれた、幾度か北進した低氣壓は其の都度鹿兒島沖から引返して仕舞つた、太鼓を叩き供物を供へて兩乞しても駄目だ、知るか自働車を驅つて旱魃視察をしても、元より無效である、滑稽なる悲劇だ、水喧嘩は天下到る所に演ぜられた、焦熱地獄に墮して兄弟血を見るとは何たる不幸だ、朝鮮の人心も亦擧げて敬虔の念を失つて居た、罪相同じ神罰覿面ひとしく旱魃の青苦を受けなければならぬ。

○今後降れば强雨だろ、吹けば暴風だろ、今年の出來秋は凶年と覺悟しなければならぬ、米相場は最早四十五圓豪を突破しつゝある、不景氣で收入の途は杜絶して居るのに金塊を嚙むが如き高價の米はトテモ買はれぬ、我々は今左樣に悲慘なる運命に直面し接近しつゝある、逃かれる可くもなき天譴だ大正四年以來時いた、種を無理强に收穫せなければならぬ時節が到來した、何かの都合で此の憂目に逢はなかつたらそれこそ神助天祐感謝し奉らなければならぬ。

○所謂奢侈品輸入稅の引上げは其の志必しも輸入奢侈品のみに限らぬ、國民が其の生活全部を緊縮し正しき道に立ち歸る樣に祈つたのであらう、然るに物價は依然として高く國民の生活は不相變放埒、虛榮と淺薄なる思想に執着して居る、自分等の住む京城の物價を考へて見たら、之を購つて得意になる心理狀態を考へたら天譴何時熄むべしとも思はれぬ、歎かはしい事だ、天意を慰める方法は別にない、增上慢の生活から離れる一法あるばかり、本然の生活に歸れ、虛僞の生活を捨てよ、我利一點張りの生活を改めよ、護王護國の爲に働け、報恩感謝の爲めに働け。

○關取衆の面白い所は素裸になつて力を角する點にある、坐禪の有り難い所は禪も緊めずに佛と人格を爭ふ點だ、民族の眞の力も亦此の狀況に於いて判然する、假りに今朝鮮にある日支兩族を素裸で競爭させたらどうなるだらう、厚い官憲の保護を得て得意になつてる大和民族から官憲の力を剝ぎ取つたら經濟的力量は果して支那人に及ぶか神樣は何れに軍配を擧げるか、驕らず急がず貪らず僞らざる支那人には底力がある、高慢な贅澤な暴利的な性急な苛酷な日本人は生活費に困しみ小智惠に引廻はされ信用は失ひ期年ならずして捩ぢ伏せられは仕まいか、自ら作る運命だ、實力が無いからだ。

○神の怒を受けたる者よ、眞面目に歸れ、簡易生活は神に近づくの道、此の道を歩めよ、この秋は吾人の魂の大練が來る……おゝ同胞よ、眞面に歸れ、喝！。

◈中島氏近著

吉田、莊一

中島司氏から『震災美談』一卷を贈られた▲中には涙ぐましいやうな物語がある。深く敎へらるゝ資料がある▲著者の勞苦と、名文とを深く尊敬する▲願くは諺文にも譯して弘く世に布きたいものだ。

京城雜筆

T總督巡視

京城覆審法院判事　伊藤憲郎

Sさんは上司の前に出ると先天的に堅くなる人であつた。それは必ずしももつと出さしたいと言ふ功利的な考へのみに依つたのでない今の地位になつても役所の廊下などバタ〳〵と音を立てゝ昔の低い地位の時と同樣に歩く根が小心の人であつた。

Sさんは床の中で其日の失策を思ひ出して幾度か懊惱反轉した、其日の朝T總督が突然役所へ巡視に見えられたとき、Sさんは先づ挨拶を述ぶべく前に出た、色々挨拶の辭を考へて居たのであるが兎が物を食むやうに口の中でもぐ〳〵と齒と舌とが相觸れたゞけで一つの言語をすら發することが出來なかつた。けれども罷り去るときチラと見た總督の顏に滿足の色が見えたので恐縮して下つた、出口のところに庶務課長を先頭にして以下の廳員が條虫のやうに並んで自分の番を待つてゐた、Sさんは隣の室にゐた。挨拶に出た二三人迄總督は蚊の鳴くやうに極く低聲でフン〳〵と言つて居たがだん〳〵人の代る毎に聲が高くなる。十番目近くにいつも元氣のいゝ若い產業技手が私はm技手で御座りますとやつたと同時に馬鹿ッ…と來た郡守のSさんは棒立ちになつて了つた。總督の聲は續いた『挨拶をするなら一緒に出ろと豫て申渡してあるに、ナンジヤ馬鹿が、時間を浪費するではないか郡守はどうした』破れ鐘のやうに郡廳舍の內外に響いた、成程申渡は豫てあつたが庶務課長とも相談して長下に對する禮であらうとの見解から一人一人型の如く挨拶に出たのであつた。

夜は明けたがSさんは一睡もしてゐなかつた、起きて鏡を見ると顏が眞蒼である、兎に角飯を濟し制服の古さを氣にしながら、劍を持ち〳〵家を出た、番頭に聞くと總督さんはとうに朝食をすまして二階の奧の室で町の有志のものと話されてゐると言ふことであつた。

Sさんは昨日のことを考へて踏段を恐る〳〵上つて見ると戸のことゝて室を明け通した二間格子のところに總督は浴衣掛けで此方を向いて話をして居るのが見える。

Sさんは踏段を上り切つてハタと當惑した、歩いて向ふ迄行かうか制ふ譯にも行かぬ……Sさんは意を決して左手に劍を拽へ膝行した途中で一二度疊の緣に躓いたがその姿勢を續けて總督の前に進んだ一座の人は形容のない顏をして彼を見てゐた、Sさんは帽子をとつて御辭儀をしやうかと思つたが制服の手前擧手すべきものであると氣が付いて矢庭に手を擧げて最敬禮をやつた。長い總督の顏はなほ伸びた。さうして眉がビリケンのそれの樣にはね上つた昨日のやうに怒つたのでない今度は魂消たのである。隨行のK課長も横を向いて言つた『閣下文官はこれですからな…』暫くあつてSさんは長い劍の遺場に困つて了つた。

夏日雜句

今村螺炎

◆

夜立して一里塚また明け易き

◆

短か夜を小役者共の幕に寢る

◆

世の義理にフロックも著る暑さ哉

◆

阿諛迎合鼻先に蚊のットとまる

◆

賢や愚や大家族飯に蠅わめく

京城雜筆

株界雜筆

京城現物取引市場　中村郁一

◎

日歩取――別名日歩稼ぎ――回顧すれば大正十年の夏頃、京取市場に短期取引の制度を設けられて（五月七日と記憶す）から賣り方は賣日歩と云ふのが買方から取れる事になり、此の日歩取りの妙味が漸く一般に知れ渡る樣になつた頃は、所謂中間景氣の到來と共に、此の日稼ぎが盛に出來た、一時は京城否地方も同樣――金融業者は殆んど總べてが算盤を彈いた――面倒臭い貸金をすれば利が高ければ高利貸と云はれる――おまけに回收するにも相當の手數や勞力が要る譯である、偶にはカケられもする。

◎

日歩取――日歩稼ぎ――と云ふ事が安全であり有利である、多少の危險を冒せば株式の投機的妙味もあると云つた風で、一時に誰れも彼もが是に走つたのである、當時は此の京取市場の株式に對する金融關係は、大正十年五月に開業した京取市場の姉妹會社たる　城證券信託株式會社、俗に之を京信と呼んだ會社の一手で取扱つてゐた尤も此の京信は京取市場の短期取引の清算機關と云ふ特殊の關係であつたからである勿論市内の各銀行でも信託會社でも株券に對して隨分圓滑過ぎる程――中には放膽的な貸出融通を圖つたものもある證券――殊に投機株に對しての金融は絶對罷りならぬと云ふ嚴しい銀行家の警戒振りである、是も一時圓滑過ぎた反動、放膽的であつた餘弊であるとアキラめれば天下は泰平である、併し太平ならぬは株券の所有者である、今日の樣に極度に株券金融の梗塞を招來したのは、强ち株券所有者の罪のみではなく、之に對してアマリに圓滑ならしめ過ぎたり、或は放膽的であり過ぎた會社や銀行家の罪である、然るに其の自分の罪は棚に格納して置いて、株券金融を毛虫の樣に嫌ふのは人間と云ふものは我儘身勝手を云ふものとは聞いてゐたが隨分銀行家と云ふものは虫のよい事をするものであると窃に株券は不平を呟いてゐるのであると私は確に想像する。

◎

餘談に亘つたが、そんな工合に金融が圓滑であり貸出が放膽的であつた爲に、株券を轉々利用して、之を資本としての日歩取――日歩稼ぎも旺盛を極めたのであつた、元來日歩取――日歩稼ぎの方法は今も當時も變りは無いが、ザット三種類に大別される樣である、第一は純粹の日歩取で外に目的がないのである、一定の資金で思ふ株を買取つて此の實株を引いて仕舞ひ、之を相當の値で直ぐ賣拔くのである、賣放して置けば買方から其の代金に相當するオケ――否株券の需給關係から、相當以上の日歩即ち金利が貰へる事になる、この手持の證券を擔保として又二重三重に銀行より低利（日歩に比して云ふのである）の資金を借出して、此の方法を繰り返して採るのである、之は株價の騰落には關係なしでやれる、即ち買つた値で賣り放して置いてもよいから、株價の騰落我關せず焉でよい、尤も渡し株の不足のときは逆に買方に日歩を仕拂はねばならぬ、之を俗に逆日歩と云ふが、此の逆日歩の場合は月に一二回あるかなしであるから心配はいらぬお金の入用の時は其の賣つてゐるのに對して、實株を渡せば何時でも代金が貰へるのである。

◎

第二には自分が豫て所有してゐる株があれば之を相當の値頃の時賣放して置くのである、之も前同樣の方法で日歩が貰へるのである、之は株價が賣つた値段よりも安くなつた場合には買戻しをすれば株價の利喰ひも出來、日歩も取れるのである、但し高くなつた場合には持つてゐる株を渡せばよいのである、第三には日歩取と投機とを兼ねた方法で、空賣をするのである、株價の高い値頃を見計つて賣放して置き、値が下つた頃合を見て買戻すのである、之は日歩を取るのと株價の値下りとの利喰とを主眼としたのであつて、都合よくドれば　よいが、反對に騰貴した場合は之は損を見ねばならぬ。

◎

無論此の日歩取――日歩稼ぎは短期取引の株に限る譯で、一時盛であつた日歩取も、今でも行はれてゐるには行はれてゐるが、諸株の取引が沈衰してゐる今日であるから、昔日の樣な盛りは見られない

京城雜筆

橋居漫筆

朝鮮鑛業會主事　德野眞士

日の出町には二度住んだ。家主は大曲と言つた。私は自分の姓と思ひ合せて、誰れも〳〵齋藤や和田や西村など言ふ、ありふれた姓でなく、少くとも有吉や守屋位の珍らし味はあると、一人北叟笑んだものである。

×

壽町の今の僑居は、二階から眞正面に總督官邸の山が見へる。峰の迂りや、甘泉亭附近の松の枝振りなど、昔の日の出町時代から、私の眼には馴染深かいものである。今年の春は、蓮翹の芽ぐむ頃から櫻の花の散る時まで、朝夕彼の山を眺め暮らした。何時も同じ所に居る山の巡査が、退屈まぎれに、手を振り足を揚げて踊り廻つて居つた時など、家内中で笑ひ興じた

×

巷居に空地を水むるは、望む者が無理である。殖銀の森さんは、あれでも京城では空地だよと、今の私の宅の周圍にある、僅か許りの空地を言はれた。けれども、私は二階の窓で充分である、下の空地は、花でも野菜でも、家人のなすに任せて私には何等の望みもない。東西の窓を明け放せば、涼しい風は思ふ儘に吹き通して、南山も北岳も直ちに私の庭園となる。曹溪寺の鐘樓と駱駝山とは東の窓を飾り、佛蘭西教會の塔を隔てゝ四圍の山々は一眸の裡に集り、首を出せば遠く北漢山の連峰が、夕の雲表に描き出されて居る。

×

靜かな夜には、何處からともなく琴や尺八の音が漏れ聞こえ、月ある夜半は、疊に長く軒の葱の影を印する。今の私は、此處を吾家と定めて今年の夏は何處にも動きたくないと思つて居る。

×

『何緣復僑居漢京』、七年前京城を去つた時には、再び此の都の人となりて、朝夕親しみ馴れたる南山北岳の綠翠を、自分の書窓より眺め得るとは思はなかつた。あはただしき旅の明け暮れに、訪ふ暇もなき先輩舊知の人々を偲びて、僅かに、ありし日の京城を思ひ出すの料に過きなかつたその山々を

×

京城は私にとりては、眞に思出多き土地である。私が始めて家を持つたのは京城である。其時妻は十八で、若き血の燃へ溢れて居つた私は、髮を高島田に結はせて、夏の夜の本ブラなどをやつて居つたが、その夢の如き時代は、京城を去る頃迄には、完全に終りを告げて居つた。

×

家を建つる野心もなく、土地を購ふ財もなく、朝に光線を慕ひて移り、夕には濕氣を嫌ひて逃ぐ。借家住居の氣樂さは、全市到る處に自分の家を持ち、別莊を有するが如く、轉々移居するの自由を有するに在る。けれども、一度住みし家は、其間取りから空地の形狀までが、妙に忘られず、自分の机の位置や、床の置物まで思ひ出されて、今は如何なる人の住めりや、如何なる物が飾られてあるやと、通りすがりに、覗いて見たい心地がする。

×

初めての家は、家主が笠目と言ひ隣りに淺草町野と言ふ產婆さんが居つた。二度目の家主は荷福荷助と言ひ、其弟が片平紋兵衞、前に世良菊之助と言ふ人が住んで居つた。

×

世良さんは、三井物產に通ふ若い法學士で、一坪の炊事場に桶風呂を据へ、湯の中、便所の中、朝起きて顏を洗ふ時から、夜床の中まで、始終長唄か淸元かを唄ふ男で美くしい妻君との間に、面白いロマンスを持つて居たが、其後大連に轉勤して、それからどうなつたか知らぬ。

×

樂苑洞には、其洞名が氣に入つたのと、空地があるのと、兩班の跡らしい朝鮮家であつた爲めに引越した。此時代には、辯護士の柳さんや、何とか候爵家にも行つて、上流鮮人の日常生活を味ふ事も出來た。隣りには植物園に通ふ綿貫條吉と言ふ人が居つた。其處の肥滿した妻君は、私の氣附かぬ間に九人目か十人目の子供を產んで、二日目頃には、もう其子を背負つて平氣で炊事などをして居つた。それでも、一疋產んでは床下から出て御飯を喰べ、又二疋目を產みに床下に這入つて行く、宅のジョンの安產振りには叶はなかつた。

×

心中餘談

京城日報社　伊集院兼雄

◇

毒を飲んだのは男の方だけで女はぴん〳〵して居たのである。それをどうした譯だつたか、私は女が死んだものだと聞いたのである。早速私は其妓樓に驅著けて行つたそして主人を呼び出した。『一體どの女なんです』と側に張出してある寫眞に就いて教へを乞ふと主人は上欄の右から二番目の女を指して此の女ですと言つた。それで私はその寫眞の女が心中したのだと確信して歸り記事を書いたのである。所がその翌朝死んだ筈の女から社の方に電話で嚴しい抗議を申込んで來た。それもその筈死んだのは女の相方の男だつたのだ。私はそれをどう言ふ譯で取違へたのか今だにその理由が判らない。が確かに間違ひだつたことは今もその女がぴん〳〵して居ることで十分である。勿論その翌日書き直して取消したことであるが私がその女と顏を合せるたびごとに『妾生れかはつたお蔭でこんなに達者ですは……』とからかはれるを極めたのである。私はその日、その出來事を記事として取扱ひながら非常な感興に唆られずには居られなかつた。それは何故だつたか？たゞ私の關係した女に起つたことだつたからだらうか？無論それに相違ないことだが、私は單なるその出來事に對して今も深い感興を惹かずには居られない。

◇

それは私が知つてる女……と言へばその女と私との關係は大方想像されやう。その女の相方の男が毒を飲んで死んだのである。原因は頗る簡單で主人の金を費ひ込んでその申譯に毒を飲んだのである。男は一度女の意中を計つてみた。が女が冷淡だと自覺して一人心中した。はでなその身こしらへには爭はれぬ此の種の女に限られた特徴があつた。が私はその女に對して單なる『侮蔑』と言ふ眼で見る譯には行かなかつた。そのなよ〳〵しい可憐な姿がしつくりと私の心に或物を目醒ましたのである。それでも私はその女と語る機會が無かつた。何處の女で何と言ふ妓であるとすら判らなかつたのである或日……それは秋の中頃のことであつた。

『心中……』と言ふ話を聞いて私の全身の脈管は激しい衝動に襲はれた。そして急いで廓に驅けつけたのである。妓樓の主人が出て來て女の寫眞を一葉呉れた。とその寫眞を手にした時、私の腕は異樣に戰かざるを得なかつた。それは電車で何時もよく見たその女だつたのである。

◇

電車でよく見る女だつた。青白い何處となく弱々しい體質の女だつた。勿論女は廓の女に違ひなかつ

◈寄稿家雜話

吉田莊一

▲原稿に就ては、いろ〳〵の逸話がある。十人十色で面白いと思ふ

▲鮮銀の飯泉さん、原稿を賴むと『二十三日迄待ち玉へ』『どうするのです』『仁川に冲釣に行く、そしてスキ大にとれるの記を書く』『でもとれなかつたら』『その時ア小生失敗記さ』。

▲龍山の寺尾さん、堂々たる偉丈夫だ、一見こわいやうに思はれるだが非常にいゝ人『原稿か、ウム〳〵、亦た僕をいぢめるか、よし〳〵二三日内に書いとくよ』——行つて見ると、ちやんとタイプライターで叩いてある。

▲筆の早いのは、鑛業協會の德野さん、旅から歸つて、汗をふき〳〵して居る『お約束してあるんですが』といふと『イエ、決して忘れてはゐません』——翌朝になると例の典雅な筆觸で、原稿が屆いて居る。

▲驚いたのは、京日の西村氏、原稿を賴むと『オーさう〳〵』とポケットから取出す『えらい早いですナ』といへば『實は八月號に書いたのです、それを今日迄すつかり忘れてゐました』——世の中にはこんな賴りない人もある。

▲本號で珍らしいのは、株式の新田さん、丁字屋の鈴木さんだらう新田さんのはキビ〳〵して居る、鈴木さんのは主張に於て、おもしろい所があると思ふ。

人蔘の話

富田商會主人　富田儀作

朝鮮人蔘は非常に古き歴史を有する古今の靈藥として內外に名聲を博して居るのであるが。

殊に專賣局が設けられて以來は一層其の聲價を高め、現在では專賣局製でなければならぬとまで信用を得て居るのである。

元來此人蔘は主として如何まる病氣に効能があるものかと言へば未だ此部分が之に適應すると云ふやうな發表は見ないのであるが一つは服用者の信用即ち神經作用でも効力に影響を及ぼすものと思ふ。

三宅博士は多年人蔘に就て精細な研究を積まれて居るそうであるから早晩適確なる人蔘の效果が決定されるであらうが、古來より唯靈藥として何によらず非常に効能のあるものだと云ひ傳へられ、且又專賣局が置かれるに及んで世間から一層の信用を得るに至つたもので、畢竟人蔘は專賣局製により一倍の信用と効力とを發輝された形である。

ところが人蔘の專賣制は極めて一小部分のもので、開城附近所謂二里四方の內に限られてあつて此處から生產するものを檢査の結果、紅蔘として局から支那へ輸出するものと、紅蔘に出來ない部分を白蔘として鮮內に捌かれて居るのであつて其の數量は誠に微々たるもので漸く鮮內の需用を充し得るか得ないか位いである。

然るに、靈藥朝鮮人蔘は萬病の藥だと云ふのて總ての藥劑に人蔘を配合し或は專賣局製と類似した、エキスであるとか其他の人蔘劑が果して純蔘精であるかと言へばそれは頗る疑はしいものがある。

のみならず朝鮮から內地へ朝鮮人蔘と稱して輸出されるものにも內地の島根縣や北海道邊りで產した材料が使用されて居り尙一昨年などは米國あたりから朝鮮人蔘の材料が輸入されたとも聞いて居る。

斯うした狀態の下に造られた朝鮮人蔘製劑は其の實質や効力の點に於て既に一考の餘地を生ずるのであるが、自分が痛切に感じたのは內地の博覽會などの時賣られて居つた人蔘劑の中に。

藥九層倍と云ふ事は兼ねて聞いて居たが之は又原價の十五層倍に垂んとする値段で、或る民間製の人蔘劑が賣りつけられて居つたのであるが、それらは効力や信用の點は誠に疑はしいものであつた斯ふ云ふものが盛んに出來るやうになれば、將來眞の朝鮮人蔘の聲價を落すやうな結果になりはすまいかと憂慮されるのである。

元來人蔘は鮮內至る所に於て生產する可能性があるのだから內地や外國から材料を仰がずとも全鮮に專賣制を布き生產や製劑を統一されれば、前述の弊害も起らず歴史ある朝鮮人蔘の爲めに又朝鮮の產業開發の上に非常なる得策ではあるまいかと思ふのである。

陽德の宿から

西崎鶴太郎

今年の夏は、一家を擧げて金剛山に避暑する計畫であつたのです、が人間萬事さう思ふやうには參らず、とう〳〵八月半ばまで、例の自宅の臨江亭で、暑い〳〵と口託を列べ乍ら、朝夕を過しました、

ところがフト平壤の山奥陽德溫泉に行く氣になり、兩三日前同好と共に、平壤から自動車を飛ばしました、峽中實に二十有九里、觸目の風光賞す可きものが多いのです陽德溫泉は弘く世に知られて居ません、それだけ純朝鮮式——純田舍式のいゝ所があります、一行は湯に浸つたり、棋を圍んだり、釣を垂れたり、さま〳〵の漫談に夜をふかしたり、大に當年の書生振下宿振を發揮して居ます、お笑ひ草に腰折二三を（八月廿一日）

大岩の蔭の溜りに網打てば小魚
三つ四つ白く光れる（樂堂）

みはるかす峰は日照るも山間の
村はかげりて夕近しも（狂雨）

碁に倦みて寢ころびながら窓の
外の山の頂わたる雲見る（樂堂）

窓にして見る山肌に秋迫りそゞ
ろにわたる風の音哉（遲松）

左團次のことなど

朝鮮銀行　岸　巖

◇左團次が來ると云ふ。向ふでは無論少しも知らぬことだが、私には舊知が來る思ひがする。

◇私が初めて彼を見たのは、まだ莚升と云つた頃、神田の東京座で一谷嫩軍記の義經をつとめた時で熊谷は今の歌右衞門當時の芝翫ー一寸柄にない樣だが何でも先代芝翫其の儘の型を見せると云ふので評判だつた。彌陀六は故人段四郎當時猿之助と云つた。ところで、彼れの義經が例の呼び止め、『彌陀六待て、ィヤサ彌平兵衞宗清待てー』とやる段になると、大向ふから『大根ッー』と云ふ呼聲が掛つた。何でも幼少から役者が嫌ひで藝道に熱心でなかつたとかで、其の頃親父を失つて間もない彼が一部の同情は負ひつゝも、不肖の兒として劇壇の一隅に悄然と立つて居た、やうに思ふ。それは日露戰爭頃のことである。

◇愈々左團次と名乘つて明治座に先代以來の門下を糾合し、歌六や女寅を客將として悪戰苦鬪を續けた頃は、よく一高の寄宿舍から、竹の皮包みの辨當をさげて、久松町まで出かけたものだ。歸りは夜更の門前で蕎麥を食つて、寢靜まつた寄宿舍の三階の寢室へ、長い階子段を蠟燭片手にコト〳〵と昇りながら、『ハテ麗らかな眺めぢやなあ』と御座船の淸正の幕切れのせりふを小聲で眞似て見たりしたものだ。寢室へ通ふ小廊下の窓から眺めた上野の森が、所々に灯を鏤めながら黑く連つて居るのも舞臺の上の景色のやうに思はれたりした。

◇そんなに明治座にしげ〳〵通つたのは、貧乏書生のこととて、いくらか歌舞技座より手輕に見られると云ふ點もあつたが、あの左團次の線の太い藝が、其の道に未熟な若い者には分りが早かつた爲でもあつた。それにもう一つ松蔦（其の頃莚若と云つた）の娘姿の初々しさも明治座通ひの理由の一つに擧げねばなるまい。その松蔦が今度は見えないと云ふから物淋しい。もう餘程靈が立つたであらう

◇明治座時代の左團次は、金廻りは隨分苦しかつたと聞いて居たが其の間に洋行したりなんぞして、次第に役者振をあげ評判も高くなり、一方に過渡的名作家岡本綺堂を得て所謂松莚十種と云はれる『修禪寺物語』や『箕輪心中』を出し、一方に新人小山内薰と結んで自由劇場の運動を起すに至つて、劇壇の革命兒として一部好劇家の渴仰をうけ、市井の人氣も年と共に加はつて當年の大根役者——今や一代の人氣役者となつて了つた

◇忠臣藏の四段目で、石堂と云へば大向ふからやんやと云はれる儲け役、藥師寺と云へば赤つらの憎まれ役と昔から相場がきまつたものだ。が大正八年の暮、私が朝鮮へ立つ前で當分東京の芝居の見納めの積りで歌舞技座の忠臣藏を見た。石堂は稍々衰へたりと雖一方の人氣者羽左衞門、例の通り『橘屋ァ』の聲を浴びながら靜々と花道を出て、さて次ぎに左團次の藥師寺の出となると、何と人氣と云ふものは不思議なものだ。憎まれ役の筈の藥師寺を迎へるのに滿場どよめき渡る勢だ。『高嶋屋ァ』『大高嶋』『日本一』などの呼び聲が驟雨のやうにふり注ぐ。羽左衞門の石堂なんぞ何處に居るか判らない位だ。其の藥師寺が散々悪まれ口を叩いての引込みに、誤つて薄緣にチョット躓いた。一體なら罵聲の一つも起きねばならぬ所だが、『大統領、頑むぞッ』と熱狂的の聲が起つたのには、笑ふのも忘れて只管感じ入つてしまつたそれが當年の『大根ーッ』なのだ

◇が、人氣は稍々もすれば藝を停滯せしめる。松竹でも大芝居をやる時には、何か左團次に『强い侍』をやらせねばと云つて氣を揉むと聞いて居る。左團次たるもの、『强い侍』をやつて大向ふの喝采を聞いてる間に時が流れることを忘れてはならぬ。その時の流れ方も德川時代のやうな悠長なものではない。『一切の古きものを葬れ』と瀨音が響く。——イヤ、飛んだことを云つてしまつた。人の身の上より我が身の上だ。ボカンとして南山を眺めてる間に、白髮の多くなつたこと。でもまあ今日はやつと雜筆社への約束を果したのだから、これから一杯やらねばなるまい。明日から大いに勉强するとしてよう。

◇兎に角、舊知の左團次が來るのだ。と云つて微力、如何とも仕樣がないから、一つ思ひ切つて『高島屋ァ』とでも叫んでやらうか。

◇此の原稿が活字になる頃は恐らく彼は京城を去つて了ふであらう

京城雜筆

南大門下から

朝鮮新聞副社長　權藤四郎介

◇

京城の文壇で一種の異彩を放つて居るのは、何と云つても永樂町人君の主宰する京城雜筆である、雜筆は名の如くに雜筆である、必しも世間並みの雜誌のやうに、內容の豐富を競はない、從つてその外形體裁から見て寧ろ貧弱である、先づ雜誌中の畸形兒と云つてよいのであらう。

◇

永樂町人君も亦その通りで、京城文壇の奇才である變物である、が必しも世間並に文士として自已宣傳もやらぬ、自已の文章の價値を或る廣告術で競り上げやうともせぬ、十年依然として孤影蕭々、その非凡な頭腦より湧き出づる想を驅るに、天成の筆致を以てし、哲理の深奧を說き、人情の機微を叙し、古今の歷史を論じ、內外の政治を批判して、八面應酬倦むことがなく、世人をして町人君の存在を忘れさせぬのは、誰も眞似の出來ぬ處である。

◇

私は永樂町人とは過去數年來の親交があり、京城雜筆の創刊には相談に預つた一人である、從つて雜筆に寄稿するのは私としての幾分の責任であるやうな感じがする、町人君も私が何か書くべき義務でもあるやうに、時々嚴重に督促せらるゝ、然し私は怠慢とか橫著とかの以外で、如何にしても筆が進まぬのである。

◇

私は閑があれば手當り次第に、雜誌でも新聞でも新刊書でも、亂讀する癖である、その中で京城での出版物では、京城雜筆は每號必ず樂んで讀むのである、讀むことは讀むがサテ書けと云はるれば書く氣になれぬ、それも別に六ケしい理由ではない。

◇

京城雜筆は世間並みの名士紳商の談や、大官の物語りとか云ふ盛り澤山な記事がない、或意味に於て金持ちや大官を煽てゝ、金儲けや爲めにする不純な文字がない、その代りに貧乏な新聞記者や文壇無名の士の筆になるものが多い、從つて看板は粗末でも、その內容は可なり異彩があり特色がある、町人君は是等の寄稿を、先生が生徒から集むる、試驗の答案のやうな心持ちで取扱ひ、採點まではせぬか知らぬが一々點檢して居るのが一寸面白い。

◇

私も此の年になつて永樂町人君に試驗せらるゝもキマリが悪い——去りとて私も名士でも金持でもなく、全く一介の老書生である、從つて京城雜筆に書く資格は具備して居る——其所で今日も原稿督促に預り連日の暑さと執務の疲れで氣息奄々たるのを排し、やつと筆を走らせて、此前後の辻褄も合はぬ妄言漫文を書いて、敢て永樂町人君の机上に呈するのである、此文を書き始め了るまで、督促の使者は、私の隣室に陣取つて動かぬと云ふ權幕であつたことを、附記して置くのも何かの愛嬌であらう

◈本町文人記

平田久雄

本町には秩父屋さんといふ書き手がある、工藤（謙々堂）さんといふ健筆家がある、俳句と筆札では倉田（靑々園）さんといふ豪の者がある▲その他、こまかにしらべたら隨分文筆の士が多からうと思ふ▲田中時計店主の如きも確に書ける方であり卸當人も『僕も書くのは好きな方だ、だが遣り出すと凝る方で……』といつて居る▲三丁目に河內屋さんがある、飴を遣つて居るが、何でも某高工の出身で、建築と漢詩には一見識ある人らしい▲おもしろいのは、四丁目のあわや亭さんが次號に『居酒屋日記』を書くといふことだ、京城一の細樓籠だ、その主人の營業日誌だ、これは振つたものが出來やう▲先號から本誌上に活躍して居るのは、二丁目の中村夢さんだ、同氏は再造翁の令息……兄妹揃つて文藻家だといふことだ▲嚴氏の文品は、先號で御覽の通り、妹さんは短歌に趣味があり、京城歌壇でも有數の作者だとのことである▲惜しいススキを逃したのは、三越の橋本さんだ、書く〳〵と空手形を發行して置いて、ひよいと東京へ行つて了つた▲仲々ズルイ。

鱸釣らざるの記

朝鮮銀行　飯泉幹太

◇

八月二十三日土曜の晝から翌日曜の夕方まで仁川に鱸釣りに出懸けたが當の鱸の顏はタッタ一度見たばかりで、ニベ、コイチ、石鯛、海鰻、鱶等一二尺のものばかり數十尾釣つて來た。當てが外れたので馬鹿に疲れた氣持がした。

◇

抑も僕が氣まぐれに釣に出懸ける氣になつたのは實に下の樣な戯談から駒が出たのであつた。先頃銀行集會所の午餐會で何んかの話の調子に『僕は非常の性急だが釣り丈けは氣が長い』と人もあらうに釣狂の山口銀行高橋支店長に話したものだ。平生『ゴルフ』の話で耳に胼胝が出來かけて居た高橋君は何んと思つたか、それからと云ふものは僕の顏さへ見れば直ぐ鱸釣りの面白いことを得意になつて話された。初めの內は此の法螺吹めが位に思つて別に氣にもとめて居なかつたが、話の上手なのと手眞似の甘いので遂ひつりこまれ何んだか鱸がピン〳〵水上に飛び上りながら釣られて來るのが見える樣になつて來た。そうなると却つて此方から高橋君に鱸釣りの話を仕懸ける樣になつて來た。そして自分が鱸を釣つた面白い經驗をした樣な氣持になつてしまつた。遂には同行を强要したばかりでなく、誰れに向つても鱸釣りの面白い事、之には相當の技術を要する事などマルデ先生氣取りで高橋君直傳の手眞似までして話す樣になつた。果ては二十四日の日曜には鱸を釣つて來るから晩酌の肴は待つて居れと多くの友達に確約してしまつた。中には當てにせずに待て居ると揶揄ふものもあつた。コウなると妙なもので、今の今まで無鐵砲に豫約したのを後悔して居つた僕がイヤがオウでも釣つて來ねばならぬ破目になつて來て二三十尾位は容易に釣れるものとトウ〳〵自分で決めてしまつた。

◇

夫には誰か證人がなくては折角の功名も水の泡に歸するだらうと心配する樣になつて來た。ソコで信用ある證人を物色し初めたが仲々ない第一番に畏わ〳〵乍ら井內鮮銀理事を說いて見たが體よく斷はられた。夫れから松原業務部長を誘つて見たが之はれ手嚴しく撥ね付けられた。ヤツとの事で目星を付けたのが米國仕込で戯談にも嘘をつけぬと云ふ『ミスター、モリヒラ』。『ゴルフ』の歸途を要して四方山の話の末に『君は今まで大きな魚を釣つた愉快の經驗を持つまい』と押しかぶした、處が『僕が米國に居つたとき八尺ばかりの鱶を釣つた事があるの、コウ大きいと仲々手では上げられないの錠を卷き上げる機械で漸く釣り上げたの』と變な調子の日本語で話された（註、ミスター、モリヒラは十七歳で渡米し、十七ヶ年間彼の地にありて中學から大學を卒業した神學博士なんだ、そして三年前歸朝して朝鮮銀行に奉職してゐが近頃漸く日本語を話せる樣になつた立派な紳士だ）ソコで僕は占めたと躊さず、此の土曜から日曜にかけて仁川に鱸釣りに出懸けるが、君行かないか。三貫目もあるのが、ウント釣れる、夫れに鱸釣りで面白いのは引ッ懸かると二三十間も先きで水上五六間も飛び上つて水雷の如く飛込む偉觀などは何とも云はれない、分けて君の如く經驗あるに於ては五六十尾釣れるのは請合だと嗾かけたから堪らない、何にも譯を知らないミスター、モリヒラは飯より好きな『ゴルフ』を棒にふつて直ぐ同行を快諾した。

◇

二十三日正午十二時四十分仁川行の三等列車に二人の『ゴルフア』姿の紳士が乘込んだ。其處には馬鹿に顴骨の秀でた、色のドス黑い馬より長い顏の老紳士が白飛白の著流しで、ステッキに大きな麥藁帽子を冠つて高等學校の學生二人をつれて、乘合はして居た、圖拔けて大きな朝鮮笠を二ッまで擔ぎ洋燈まで用意して居た。老紳士と『ゴルフア』とは互に會釋した。之は云はずと知れた高橋釣狂親子と僕等だつた。高橋君は今晩から明日はステキに釣るよと鷲の嘴の樣な鼻を左右にピク〳〵さして笑つた。僕は『スコアブッグ』を取り出して釣に關する色々の懸賞の約束を記入した。總じて釣りと云ふものは釣つた瞬間より釣る前に色々釣れる事を想像するのが樂しみではないかと考へた。特に僕は何事によらず無暗に想像を逞ふして樂しむ癖がある（未完）。

漢江雜記

殖産銀行　櫻井小一

松本君は常に羽織袴で行動に不敏活のやうだが、原稿取りには常に妙手を振はれる――お得意の將棋のやうに――僕もヤット王手飛車取りを逃れたと思ふたら遂に雪隱詰の難に遇ひ、舊稿をせしめられた。

○

朝鮮の河といへば、一見沙原だか畝だか見境がつかない、平素は殆ど水といふものがなく、又あつたにしても蛙の遊び場所か、洗濯女の寄合場位のもので、頗る未開、平靜の趣を呈して居るが、一朝雨が降れば四方の禿山より龍の如く推し下す水が、一時に氾濫して誠に厄介なものである。『內如菩薩外如夜叉』とは全く此事で、洪水の跡は田畝も洗濯場もルーラーでならしたやうになる。併し凡ての河が皆その通りではない、平素洋々として水を湛へ、立派に船の通ずる有用なる河川がないではない五大江の一たる漢江の如きは即ち此の後者に屬するもので、流域は忠北、京畿、江原の三道に跨り、下は仁川より上りは忠州、春川迄長流蜿蜒として舟楫の便が利き、沿流の物資集散には非常なる便益を供して居る。併しながら汽艇の航行は、仁川、龍山、麻浦間六十餘浬に過ぎない、是れより上流は淺瀨かあるので、底の平面な高瀨舟の狹長な河舟でなければ通航は困難である。龍山殊に麻浦は如斯航路の仲繼場であるのみならず、京城の大消費市場を控へて居るので古來重きを置かれ從つて麻浦には穀商の素敵な資産家が出來て、いまだにその餘勢を振うて居るが、その後著しき發達はして居ない。その所以は租稅制度の改正やら陸運の發達した爲めでもあらうが、航路の不安なことも餘程重き原因をなして居る。――船夫に聞くと仁龍間で難所は四十餘箇所もあるといふ。

○

京城仁川間貨客運送の通路としては三筋ある、第一は十餘里の道路で、これ漢江の橋梁の完成によりて曩きに開通し、荷馬車が往復出來るやうになつた。次は約二十四哩の鐵道で、これが現在では專ら貨客の大部分を吸收して居る。第三の水路に至りては唯だ巨大重量の物品や、時日を爭はぬ貨物の運送に供せられて居るのみで、誠に微々たるものである。此の河の利用を屋形船の夕涼や、鰡の網打位で濟ますのは、誠に勿體ないではないかといふ所から過ぐる年一行十餘名稅關ランチの中でも吃水淺き第二宮丸を乘船に充てゝ視察に出縣けた。――午前七時に仁川稅關棧橋をいさましく出發した、その時潮は六七分方滿潮であつた、全體此の河の航行については時間よりは干滿の度に氣をつけることが最も肝要である即ち潮に乘りて難所を通過せんとする準備である

○

さて船は港外に出で、直に西北方江華島の水道に船首を向けて一直線に走り出した、此の水道中江華島の月串迄は、海州通ひの汽船も双方より通航して居るから難所とはいへ、比較的幾分かの安心がある、我等の乘船宮丸の速力は六七浬、吃水は五尺六七寸である、殊にッレ潮だから暫時にして港內の勿溜易、栗島、甑甑島を過ぎて、漸く細於島に近づき、今や江華水道の入口に達した、此處迄の航路は頗る平凡で、別に奇とする程の風物はない、寧ろ朝寢坊の水禽を此方から驚かした位のものである港を出で、既に一時間にして、江華島の靑草綠芝は手が屆くやうに見へる、此の邊陸は鐵砲打、海は鱸釣りの得意場所といふ事である

○

顧みれば仁川舊居留地山下の赤屋根、白堊の洋館は幽かに一行を見送るが如く、港內淀泊の汽船や電氣會社、乃至は再製鹽所の烟は、朝の靜かな空氣に條をなして昇つて居る仁川の町は海上より望見する方が餘程立派だ。蕪や葱の作つてある埋立地は公園の芝生の如くに見へる。空屋も屋根許り見へるから誠に豪勢だ。烟の具合では大きな製造工業があるかのやうだ、更に行手を見ると滿潮の時等には水道の入口は一寸素人には判明しない。

○

水先案內者の說明に依ると、此所が即ち『橫一』と稱する所で、仁龍間始めての難所であつて、河はS字形をなし而かもその入口に江華島側より一直線に磯が突出し、その上を例の潮が凄ましき勢ひで

京城雜筆

流れて居るから船はS字の外側の方に寄りて通航するのである、又近所にサンドロモツコといふ所がある、昔サンドウとかいふ渡船の船頭が敵に追はれたる戰士を江華島に避難せしめたるに、彼等戰士はその船頭が再び追手を渡さんことを恐れ、その恩義をも省みず之を斬棄てたるよりその名稱が起つたといふことである、眞否は知らないが此の天險と共に誠に凄ましい所である、此處には最近團平船一隻中腹を折られて汀に放棄されたるが見へる。此の邊の江華島側は水邊に城壁を設け、所々に城門があり砲臺がある。併し既に荒廢して蔦蔓の茂るが儘に委せてある誠に寂寞たる氣分であるが昔は此の水流と此の城壁とは要害堅固であつたらうと想像される、從つて江華島には他の地方官より權限廣き留守を置かれ、その守備に任じたやうである、明治の初年日本の軍艦が來て水を取りに上つたのも此の邊であつて、現に大きな池があつてその水は飲用に適し、仁川に供給する氷は此の池の自然氷であるといふが、大なる經濟的價値のあるものではない。

○

その他に江華島での特産物を擧げて見れば、名産として柿が出ると共にトヂリ即ち肺ヂストマの産地である。柿は串柿とするが實が小さいのと串が大きいので食べる所は幾分もない、お正月の鏡餅に載せる位のものである、慶北安東の柿のやうに改良して貰ひたいものだ、併しこれでも豐年の時は副業收入として地稅の納まりも宜しいといふことである、農家經濟の一般も大概想像がつく。而して肺ヂストマに至りては實に厄介な代物で、生水や生野菜を平氣で食用するから鮮人間に却々多い、併し肺病のやうに傳染はせぬから安心だが、こんな産物はない方が增しだこれと帶水の通津郡（今の金浦郡）は通津米、通津鹽を以て古來有名なるものであつたが、現在は更に價値がない。又無烟炭鐵鑛の採掘あれども大仕掛のものではない若し鑛床が大なれば漢江の便を控へて居るから有望なことであらうと考へられる（未完）。

金剛山雜詠

明治町
木村屋主人　田中秀一郎

長安寺

僧二百この松かげの山寺に高麗の昔しを夢みてあるか

鳴淵潭

昔しこゝに僧沈みきと聞く淵の瀨の音高く風寒きかな

三佛巖

苔蒸せる石よ刻める御佛よ汝が千年の夢語らずや

船潭

船潭は奇しき姿よ瑠璃の風呂夜は山姫の來て浴みなむ

獅子岩

龍の棲む麗の淵近く獅子岩の脅かすごと烈日に立つ

白雲臺

綠なる千仞の谷谿して水くゞる見ゆ白雲の峰

溫井嶺

山深く鶯啼けは座ろにも鄕戀しけれ人戀しけれ

萬物相

大いなるこの大いなる神技にたゞ默しけり小さき吾れは

九龍滯

岩を裂きて飛瀑千丈山祇の威靈高鳴る九龍の谿

溫井里

木の香匂ふ溫泉の宿はよし腹這ひてものなど見れば蟬時雨する

海金剛

山を出でゝ海に向へば吾が心沖の小島に吸はれ行くかな

叢石亭

亘柱高く簇り立ちて紺碧の波と鬪ふ東海の濱

歸路

砂濱に『はまなす』咲けり潮風に三十六里自動車の道

京城雜筆

關白苦行記

京城日報社　西村滿藏

御臺所に寢付かれたので、さすがの關白殿も、この數日は實に慘憺たるものである。

この頃ならば、社から歸ると何は兎もあれ、先づ一風呂浴ひる。褌一つで冷い麥酒でも呷りながら、夕飯を濟ますと、すぐ咬へ楊子か何かで夕顏棚の下涼み……と云ひたいが、生憎夕顏棚はないから、隣屋敷のポプラの梢でも眺めながら、敷島の煙を悠然と輪に吹く、イヤ吹きたいと云ふのがまあ人情……。

それに何んぞや、この頃はやつと一日の勞働を了へて、ぐつたりとなつて歸つて來ても、一風呂浴びるどころか、洋服を脫ぎ捨てるとすぐ飯炊きにかゝらねばならぬ、自分ひとりなら、面倒臭いから食はなくても我慢するが、病妻や子供が腹を空かして待つて居るのだからさうは行かぬ、止むを得ず、米を磨いで瓦斯にかける、それから特別急行で風呂を炊付け、掃除を濟まし、飯を食つたところで始めて風呂に這入る、これが先づ歸宅後のざつとしたプログラムである。と云つて了へば何んでもないやうだが、さて實際にやつて見ると、馴れぬ仕事だけに仲々骨の折れるものだ、然も勞力の割合には少しも能率が上らぬ、斯んな阿呆らしいことはない。『新世帶馴れぬ竈の勝手は知れず……』と云ふ唄も、自分が實際にお三どんをやつて見て、始めてその眞意を味ふことが出來る。

飯を炊くと云ふことは本當にむつかしい。硬かつたり、軟かゝつたり、かと思ふと焦げついたり、仲々マ、にならぬものだ。始めのうちは始終しくじつて、

『お父ちやんの御飯はいや、お母ちやんが好い』

と子供から、不信任の決議をされたものだが、所謂習ふよりは慣れろの譬へ、段々科學的研究を――と云ふと聊か大仰だが――重ねて行くうちに、もう此の頃では何處に出しても恥しくない、ふつくらした、立派な御飯が出來るやうになつた。それも『三度に一度』とか、『割合』にとか云ふのではない。何時炊いても百發百中と云つた鹽梅だから、病妻も

『本當にお上手におなんなすつたわねえ』

と心の底から感服して居る。然し斯んなことはいくら感服されたところで、ちつとも嬉しくない。寧ろ『俺は新聞記者より飯炊きの方が適任かな』と思ふと情なくなる位だ。

御飯が出來ると『皆、茶碗と箸を持つて集れッ』と號令をかける、二人の子供は心得たもので、チャンと自分〳〵の茶碗と箸を持つていつもの通り自分〳〵の席に著く

ポッポッポ、鳩ポッポ
豆がほしいか

それやるぞ――

時によると姉の子が、茶碗の樣を叩きながら斯んな歌をうたつて、示威運動をやつて居ることもあるつまり『われにパンを與へよ』と云ふのである。斯う云ふのが大きくなつたらストライキの張本人になるのだらう。末恐ろしき少女かなだ。

夕飯の跡始末を濟ませて、風呂から上ると本當にヤレ〳〵と云ふ氣持になる、けれども是は恰も病人に小康があるやうなもの、湯上りの軀體に涼をいれながら、是から一つ、新聞でも見やうとすると

『父ちやん眠むいよう』

と來る。床を取つて漸く寢かし付けたと思ふと、今度は濕布取替への一幕になる。それから新聞を見たり、書き物をしたりするので、自分が寢るのは何うしても一時か二時になる。それも朝までぐつすりと寢込まれゝば我慢も出來るが、漸くトロ〳〵とした頃、即ち一番眠い盛りの三時四時と云ふ時分に妹の子が殆んど毎晩のやうに、きまつて呼起す。

『父ちやん、うんこ――』

『何、うんこ？お悧巧だから朝しなさいね』

『いやん出るようアーン〳〵』

あゝ八釜しい、今時分うんこを垂れるやうな子を誰が製造した……

……と聊か腹立たしい氣分にもなるが、泣く子と地頭には勝たれぬとやら、澁々起きてW・Gに連て行くと云ふ始末である。無論その時は、ハツキリした意識などはない夢と現の間を彷徨して居るのだ。子をもつて知る親の恩、細君に寢付かれて初めて細君の有難いことが判る――などゝ云ふと、すぐサイノロと笑はれるかも知れぬが、

兎に角是では遣り切れぬ。然もなさねばならぬことは徒らに多い。手紙も出さねばならぬ、『雜筆』の原稿も書かねばならぬ、あれもせねばならぬ、是も——斯う考へて來ると、心はおのづから不滿と焦燥に波打つ。せめて『おばさん』でも屈ふたら、と思つて探して見たが仲々見付からぬ。それで相變らず、けふも飯炊き、あすも飯炊きのお三どん生活だ。

一體、斯うした生活が何時まで續くのだらう。

入院前後

永樂町人

○

子供が病氣をして、入院した。いろ〳〵な問題が起る——それに就て、考へさせられる。

○

四月から病院にかゝり、三回手術した。

私としては、可なりの犧牲を拂つて居る。

その上入院しなければ、快癒を期し得られないといふ。

子供を跛者にす可きか、此の上借金をす可きか——自ら守らうか、子供の犧牲たる可きか——第三者としては問題でないであらう。だが私の懷合では、重大な複雜な問題である。

況んや借金といつた所、決して易々と貸してくれるものはない。顏を赤めずして、私はそれを切り出し得ない。

病兒の父は、眞につらいものである。

○

主治醫は、幸にいゝ人である。親切にして、行屆いて居る。

だが醫師にして、患家の勝手元を考へてくれる人が幾人あらう。

患者は皆金持らしい顏を、醫師の前に裝うだらう、だが眼光紙背に徹して貫ひたい、高利を貸つて、兒のために、醫療を求めるものもある、書物を與して、病兒を醫家に托するもある。

患家のために、涙を流して貰ひたい——それは決して、保養の沙汰でない。

○

入院後一回だけ諸拂ひをくり延べた。

すると、雜貨屋の番頭は、

一體いつお拂ひ下さるお見込で……。

といふ。

私とこでは、米屋、炭屋、魚屋、雜貨屋——みな四年越しの取つけである。

嘗て一回だも、不拂、未拂をしたことがない。

然るにどうだ。

いつお拂ひ下さる見込み——。

とは何事だ。

私は彼等の現金に呆れざるを得ない。

世の中は實に、住みにくゝ作られて居る。

○

私は四年前から吉野町に住し爾來御成町、和泉町と移轉したが、商人をかへるのは、面白くないといふので、今尙ほ吉野町の商人から物をとる。

是れを城内の物價に比すると、二割位高い。

更に吉野町界隈からワザ〳〵來るとて、家内は不用の物まで注文した。

遠路だからとて、割高の物を買ひ馴染だからとて、不用品を買ふ。

その不經濟や知る可しだ。

私は豪所奉行の不在を好機として斷然諸政改革に手を下した。

古い商人を拒絶し、新しいものと現金交渉を開くことにした。

男子だから、ワザ〳〵來たとて情實で物を買ふことはない。

奉行在宅時代よりは、四割減位の經費で行けさうだ。

○

唯一つ困るのは、赤坊を私にうちつけられて居ることだ。

夜泣かれ、曉に泣かれ、晝泣かれ——そのたびに、乳房を所有せざる男子の不自由を、しみ〳〵痛感しつゝある。

◈看板堂主人

吉田莊一

黃金町の早川看板堂の主人は先づ名物といふ部類の人だらう▲新聞雜誌社から廣告をとりに行くと『どうも難有うございます』と頭をさげる▲餘り『丁寧過ぎるではないか』といへば『だつて廣告を出さうと思つたつて寄りついてくれない家もあります——』▲此の人義俠心と、名人肌なところがあり看板屋としては押しも押されもせぬ京城第一流だ。

涼臺艶話

今村螺炎

◇

◎京城雜筆の編輯長は『原稿の洪水だ』と自慢して御座る、旱り夏枯の當節何と素晴しい景氣ではないか、併し有るが中に艶物の甚鮮いのは物足らぬに由で、其洪水の面もに花屑の一ト片ら浮べ情趣を添へて見よふと、炎天の加減か柄に無い事を考へ出した。

◎途中で藝者に出逢つた時、色氣は抜きにしても——抜かない方が猶よいが——毛頭悪い氣持は致さない、借金取りや肥取にブツ突かつた時とは少々感じが違ふ、夫れは人間の本性として常に美にあこがれて居る、藝者の持てるサムシングが胸奥の琴線に觸れるからであ。……ナンテ高尚に言はなければ耳觸りが悪い。

◎藝者に對して『嗚呼憎むべき悪魔！バット我は汝が密かに我ハートに迫りて之を掻き拐る事に無上の歡喜を有す』と、昔希臘の戀愛哲學者ベースケ氏が言つた？言はぬ？は保證の限りで無い。

◎『美形』『奇麗首』『アダ者』ケダモノなどは彼女の代名詞である、實際藝者は美しい、併し夫はラシイやつの事で、其所へらのデモ連中は算盤に入れてない事無論だ、一口に美しいと言ふが一體どこが美しいかと詮索すると話が少し小面倒になつて來る。

◎女の美を構成する髪や顔の造作は、昔から俺の樣なヒヲ人が調べ盡してあるからヌキにするが、唯一つ衣裳の事は言つて聞かしてやらねば氣が濟まぬ、先づ柄は勿論次は仕立だ、ドーデ自腹で無いから裁縫賃にウント出すに限る、出來上つた時早速呼出しをかけて、之れを抜衣紋に著なし『仕立も柄もイーでしよふよく似合つて』喃ン姦シと見せつけて砂糖屋の杓子を極めると、嬉しがるに極つて居る。

◎其次は著こなしだ、裾を曳くと屋長の金魚が痛風に罹つた樣な恰好をし、帶を結へば下手の拵へた昆布卷の樣なザマになる……のは感心せぬ、兎角帶は男の力でキユーくと締めボンと叩くに限ると云ふて、京城には箱屋が無いからと俺に頼んで來ても箱屋をやつた者は必ず總理大臣になると受合へぬ限り平に御斷りだ、尤も時と場合により或は貰ひが掛つて來て中途から起き上つて義理に外の御座敷へ行く時、スミマセンガと頼まるれば男氣を出さぬとも限らぬ。

◎擧止動作の嫺雅優美即ち折り屈みのシナのよいと云ふ事は、衣裳の著こなしに關聯して美の要件を成すことに氣が付けば、其基調となるべき踊りの御稽古に精を出して勵むべきであるゾヨと、玆の所一同を叱り置く。

◎要するに蓋し以上は形體美で畢竟人形の美と同じく美に生命がない（外形美十精神美＝眞の悪）である、これから藝者の魂の底から美を光らして見よふと、語らぬ事に力瘤を入れて、此暑さに御苦勞千萬の話であるわい。

◇

◎藝者に○助、△吉、□八などゝ男名前を付けるのは、俠客にあやかつたから起源したもので、伊達と意地此二つは藝者の必要素である、之れを抜けは梅の花に匂ひの無いと同じく全くゼロである、白拍子靜が鎌倉右大將の前で平然と賤や賤とやつてのけた如く、堀の小萬が備前侯の前でタンカを切つた如く、權勢に恐れず金力に屈せず意地を立て通す、其凛として犯すべからざる所に男にも及はぬ氣概があつて、其處には雪よりも潔き俠艶美と云ふものが光りを放つ

◎よく近松物などにあるが、差づめ梅幸か菊五郎の役割である、飽きも飽かれもせぬ相思の中を重き義理から責められて『御話はよく判りましたサツパリ奇麗に思ひ切ります』と、身を切らるゝ思ひで承諾し、事情を知らぬ相手が來りし時、心にも無き愛想づかし、男が火の如く怒つて立去りし跡で、ジツと坐つて思ひ入あつて石佛の如く動かない、やゝあつて微かに『濟みません勘忍して下さい』と一滴百萬ルーブル位の涙をポロリ……ポロリと膝に落す、少々時代めくがそこには悲痛美と云ふものがある。

◎口八丁手八丁粹も甘いも嚙み盡した中年增の姐三味、生來色を知つて戀を知らざりし彼女が、或機會から純粹の戀に陷る、相手の前には、女將や朋輩から不思議かられる程全く別人の如くなる、海鼠の如く軟に猫の如く柔順しく口數を利かず妙にはにかむ、寔とに戀

は曲者支人の化合物を分離してウ　しないからデモ連安心あつて然る　ナシ國の住人とには極内々で話し

は曲者玄人の化合物を分離してウブの素人に還元する……と云ふ所に、得も言はれぬ可憐しさがあつて嬌羞美が多量に飜れる。

◎長繻絆に立て膝、丸窓の外には雨の牡丹が電燈にしめつて居る……と云ふ樣な場面に置かれた時、眞紅の花園に眠るべく、歡喜に逸る心をさりげなき體に、一抹の烟が天井の彼方に流れた頃、燃ゆる眸から嫣然微笑、軈て靜かに畫の國から夢の國へ……と云ふ時に、むせるが如き妖艶美が濃厚に發揮せらる。

◇

◎以上の……と云ふ樣な美は美たが何となくイヤミがあつてアクがある、推賞すべき美でない、通人粹士の採らざる所である、抑も純粹の藝者美といつば、

◎盛裝を凝して晴の舞臺に現はれ出たる時——無論浩元、常盤津、長唄、富元、歌澤、新內、義太夫バイヲリン、マンドリン、ピヤノにヲルガン、踊りにダンス……そんなバタ臭いものは駄目だ、兎に角一流の名人であつて裳族準婆族で無い事は申ます迄もない——顏面神經が異常に緊張して輝いて居る、滿場が水を打つた樣にシイーンとする、やがて其技藝の妙所佳境に至つて技神に入つた時、神韻漂渺として其所には唯氣高き藝術の女神あるのみである。

◎爰が即ち彼女の最高美を發揮したる時で、藝者の美を鑑賞するならば、此の所にのみ目標を置くべきであるんである、其の以外の部分は減多に鑑賞すべきでない、是れが本篇の骨子であつて又結論であり且つ余の信條である……と云ふて一般の公衆にはウカと宣傳はしないからデモ連安心あつて然るべし、但し道心堅固な人間とモンナシ國の住人とには極內々で話して置く積りである。

夏を送る

京城日日新聞社長 有馬純吉

◇

蕣花の色褪せし瀨氣西より來り、半島の秋早くも郊墟に入り、新凉漸く動かんとす。

山を憧憬し、水を思慕し、綠蔭深き處、凉を納れ、澗水せせらく邊、暑を避けて、自然の懷を想ひしも既に過去の事に屬するのである。

◇

併し吾等は夏の情調を變するものである。夏は赤裸の世界である。海に河に、野に山に、又田園に家庭に、凡そ到る處に赤裸々の光景を展べ、大古の情趣を示さざるはないのである。夏は自然に虛飾なく景情に浮華がない、物我皆眞如界に入つて居る。

◇

若し夫れ、朝暾血の如く、水平線上に現はるる曉天の景象、落暉西に沈まんとする淡紅の半天を望む時。誰れか大自然の大威嚴に擊たれざるものがあらふ。

闌干たる星斗、變幻怪奇を極むる白雲、沛然として臻る白雨、綠蔭深き處一陣の凉風、何れか又夏の情調を唆るに相應はしい自然の景象であらざる。然り夏の情致は、なべて眞である、善である、美である。

◇

人は炎熱に苦めども、我等は夏日の永きを變するのである。人は爍々たる驕陽に苦めども、我等は爾々たる此氣分に與みするのである。

戯稿『或る夫婦』

ちゝぶや主人　堀内滿輔

時　夏の夜十一時過ぎ
場所　或町家の屋上涼臺――それから一町許り離れた或る料理屋の二階座敷
登場人物　中年の夫婦――遊客二人、藝妓二人、仲居

湯上り姿の夫婦睦まじさうに團扇を使いながら涼み臺に現はれて藤椅子に倚る。

本町通りの店屋も、もう大方戸を閉めて人通りも追々尠くなる月のない空には星が一面に輝いて黝んで見ゆる南山には天滿宮の獻燈や、そちこちに點在する街燈の灯がいとど煌いて、冷たい夜風が浴衣の袂を輕く拂ふ樣は如何にも涼しさうである。

藤椅子に仰向になつた主人は何やら獨言で星の名などを數へて居る妻君『あなた一寸御覧なさい、○○のあの座敷に燈が點きましたよ』

主人『さうかどれ……』

と藤椅子から體を搖り起すと、直ぐ眞向ふに開け放した座敷がすつかり視透かせる。だが明るい向ふの座敷から暗がりの涼臺の方は判らない。

無論二次會の客であらう、仲居の案内で二人上つて來て、來るなりその若い仲居を捕へて二人がかりで胴上げをして、キヤッ〳〵と云はせる聲は夜の寂しさを破つて一際冴えて聞へる、その騒ぎが一しきり濟むと座敷の眞ん中に大胡座をかいた、一人がイガ栗、一人が藥鑵頭、嚴越しの月、夜店のステッキ、そんな興のあるのぢやない、こりや全くの蔓なし藥鑵である、遠くから見ても電氣の照返しでピカ〳〵光つて居る。

イガ栗『酒を早く持つて來い、酒を、酒』

藥鑵『もう酒はいらん、女をよこせ、女だ』

仲居『まあお靜になさい、今すぐあなた方のお好きな妓を喚んで居ますよ』

あつさりとしたお膳が運ばれる、お銚子がつく、ヤ、大人しくなる間もなく現はれたのが粹な銀杏返しと、媚めかしい束髪。

二人『今晩は……』

とつゝましやかに兩手をついて、挨拶が濟むと客はめい〳〵二人に盃を突出す。

イガ、藥鑵一所に『さあ一盃いこう、思ひざしだぞ』

銀杏『あらいやよ、一度温めてから頂戴な』

束髪『ほんとだわ』

と云ふて二人とも盃を受けず、各二人に酌をする。

其の内瓜彈きで三味線が鳴り出した、拳を打つ、涼臺の夫婦はこの光景に興を唆つて眺め入る殊に細君は知らないのであるが銀杏返しとこゝの主公は宴會などで度々會ふのが緣となつて唯だの仲ではなかつたので、最近は足繁く通つてお互に浮氣は……などと堅い約束がしてあるといふ仲、この場面がどう展開するかと云ふことは主人にとつては天下の一大事！

『あなた一人と定めて置いて……』

と確かに銀杏返しの聲である。

細君『文句入りですはね』

主人『フウ蓄生やつて居やがる』

と覺えて居ると云はん許りの表情をする、が細君は何も氣づかない

藥鑵さん大分酩酊して來たと見へて銀杏返しの側の脇息にもたれかゝつて足を投げ出したが、銀杏返しが脇息を押しのけて體を乘り出して膝を枕に提供する。

細君『あれを見るにつけても男といふものは隨分得なもの、勝手なものですはね』

と如何にも不平さうな表情をする。

主人『なぜ？』

細君『なぜつてさうぢやありませんか、主人はあゝして馬鹿な眞似をして居るのに、お宅では奥さんがちやんとお留守居して今か、もうかと待ちあぐんで被居るでせうに、本當に女といふものは弱いもの、つまらないものですはね』

と細君の沈み勝ちの同情論も、主人公の耳に入るべくもない、今向ふの座敷で仲居が藥鑵さんを拉し去つた、あとから續いて銀杏返しが何處ともなしに消えてなくなる山雨將に到らんとして、風樓に滿つとでもいふ光景である。

お茶屋の内情に通じない細君には、こんな光景も沒交渉だが、主人公の目から見ると重大問題である。

細君『あなた、もう寢みませう、もう大分遲いですよ、いつまであんな處を見て居ても仕方がありませんわ』

主人『……』

間もなく前の順序でイガ栗も、束髪も去つて座敷は空になる、電氣はパッと消える。

主人『ア寢よう』

と早口に氣がつたいやうの調子ですつと立つてずん〳〵下に降りて行く、細君何だが主人の樣子に合點が行かないやうの表情をして靜かにあとをついて降りて行く（幕）

秋日雜記

永樂町人

秋

秋を迎ふることは、最大の歡びである。

我々は長い夏に、いかに苦惱し、倦怠したであらう。

大氣

秋を迎へて、先づうれしいのは、大氣の澄明なことである。

それは、はだへに觸れて、冷々とする。

天を觀ても、地の涯を觀ても、水晶宮裡の如く、透明である。

そして是れを嗅げば、何となく、芳意を秘めて居るやうに思はれる

又、

唐代の詩人が、秋風に臨んで、

梁王昔全盛、賓客復多才、
悠々一千年、陳迹惟高臺、
寂莫向秋草、悲風千里來。

と歌ふたことは、有名な事實である。

亦日本古代の高貴の方が、秋郊に鳳輿を停め。

哀れ昔いかなる野邊の草葉より
かゝる秋風吹きはじめけん

と歎ぜられたのも、人の能く記憶する所である。

餘りに澄明なれば、人に省思の機會を與へる。

深く省思すれば、人は誰れでも悲涼の心境を有つ。

月

秋に樂まるゝものは、月である。

太陽が西に沒すると、同時に滿月が、東の地平に出る。

秋空晴朗なれば、月高く、且清い人間の最もすぐれた詩が、明月の夜に作られたことは、それが空間隨一の美體である證據でなければならぬ。

又

が、地上の月は麗しく、月中の月は、決して麗はしいものではない

それは實は、死滅せる天體のなきがらに過ぎない。

そこには大氣もなく、水もなく、雲霧もなく、湖海もない。

大氣といふ調溫機關がない故、晝は溫度二百度（華氏）、夜は零下三百度（華氏）――それ故、生物にとつては、恐怖の世界、死滅の世界である。

又

金葉集に、

宵のまにほのかに人を三日月の
あかで入りにし影ぞ戀しき

詩人の想像を、たうとしとする。

が彼自身は、決して詩的天體ではない。

蟲

草間に咽ぶ蟲聲を、私はなつかしむものである。

或るものは、金鼓をうつやうに、或るものは、銀笛を吹くやうに、漕々切々として月下に彈じて居る

花草の原のいづくに金の家
銀の家すや月夜こほろぎ

が、彼等は、決して原始音樂者のやうに、舌や、口や、咽喉で歌ふのでない。

彼等は機械音樂者だ。

樂器を以て、秋夜の美を推讃して居るのである。

即ちきりぐすや、こほろぎは、その前肢を相摩し、亦たすゞむしや、まつむしは、その後脚を相鼓して居る。

何たる巧妙な技巧だらう。

私達は、その慧智に驚かざるを得ない。

果實

秋は亦果實の天國である。

月前には、芋、葡萄、枝豆があるしぐれ、木枯の夜には、栗、柿、銀杏、椎が樂まれる。

茸の強い香が、厨房の外に漏るゝのも、同じく秋でないか。

旅

私達は、秋を迎ふるたびに、旅を思ふ、出獵を思ふ、散策を思ふ。

江渺々釣の絲吹く秋の風

要するに、太陽の大壓迫（夏）から脱出した我々は、神身ともに、頻に跳躍を覺ゆるのである。

◈運動員の話

吉田莊一

京畿道の時實知事さん、頗る平民的とよりは一種の仙骨を負ふて居る▲デ、若い新聞記者あたりからはお父さんのやうに思ひ慕はれて居る▲あの人に原稿を賴みたいといへば、誰でも知事さんなら僕が賴んで上げやうといふ▲愈々正式に賴む日が來て、社員が推參すると、知事さん例の要領で『フーム話は聞いた、所で君ンとこには無數の運動員が居るね』『どうしてです』『だつてその話ならモウ之れで四五人目だ』▲社員呟いて曰く運動員はよかつたね。

編輯後記

吉田莊一

◎本號の原稿は、去る二十四日に大部分印刷所へ廻し得たほど迅速にあつまつた――尤も目星をつけた人の中で、旅行や避暑が多く、或は出來榮えとして、先號に劣るかも知れない――但し編輯者としては、力の能ふ限りを盡したつもりで居る。

◎寄稿家各位が本誌に對して、十分の御了解と、同情とを有たるゝことは、いつも乍ら感銘にたへぬ。先月の如きは、隨分凌ぎにくかつた――にも拘らず言下に寄稿を快諾せられた方が多い――感激を禁じ得ない。

◎慾をいへば、原稿の長さが少し宛つ延長しつゝある、一人一頁が漸次ゆるみつゝある、御熱心の餘ではあるが、體裁上――亦より多く寄稿を網羅する上に不都合が多い、殊に編輯上或る一人の稿が、一頁を越へること二三十行なれば、次に置かるゝものは、それだけ不體裁の位置に甘んぜねばならぬ、此邊は深き御了察を願ひたい――最も品にも依る、內容にも依る、決して一律的に劃しやうといふのではない、どうか寄稿家御自身にこの邊御判別を願ふ。

◎それから一人一頁といつても、どちらかといへば、十四五行の空地をあまし、そこに小話題を入れた方體裁としておもしろいと思ふ但し是れは決してお强るしない、唯だ編輯者の趣味を申上げるだけである。

◎九月は、秋風郊墟に入るの日である、古人は燈下書に親しむ可しといつて居る、願くは寄稿家各位が一段の御聲援を祈る次第である

營業部から

平田久雄

▲本月以後本誌定價を、四十五錢に改定しました、是れは過去の經驗から來たもので、決してボル次第ではありませぬ。

▲元來本誌は京日社で印刷して居るが、實費一部當り二十五錢以上かゝるのである、だから從來の値段では、全く社に於て損しつゝ發行を持續したのである、その上に社費が要る、編輯費が要る、社員は生活を立てゝ行かねばならぬ、四十五錢――決してボルものではない。

▲最も發行部數が現在の二倍三倍なれば、定價は緩和し得る、四十五錢を以て、永遠の是とするものではない。

▲是れを發表するに就て、大に苦慮し、大に躊躇した、が方策は是れより外にないと信じ、不本意乍ら讀者の御了察を願ふ次第である――私も苦しい。

大正十三年九月八日印刷
大正十三年九月十日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 下村鐵男
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

京城雜筆

九月號から

定價改定

一部定價金四十五錢
一ヶ年郵稅共金五圓

廣告

細工の御用は
本町
德力へ
電本三九三九

京城 德

金銀白金

地金ノ御用ハ
京城明治町
德力本店出張所
電本二〇八八
一五七二

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 **富田商會**

長電話本局三二〇九番
振替京城四五六八番

秋物背廣服
同オーバーレインコート
新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豐富
御注文に應じ特製仕候

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

有隣生命保險株式會社
朝鮮支部
支部長 山路右近進
黄金町二ノ一〇〇
電話本局一三五六番

古河電氣工業株式會社
京城出張所
長谷川町八四
電話本局五八九番

丈夫て
スタイルのよい向上靴

『正しき製作』を信條とし材料を吟味精撰して丁寧親切に作られたるもの、是非御試み給はん事を

◉紳士向◉學生向◉女學生向

豐富品揃居申候

京城南大門通

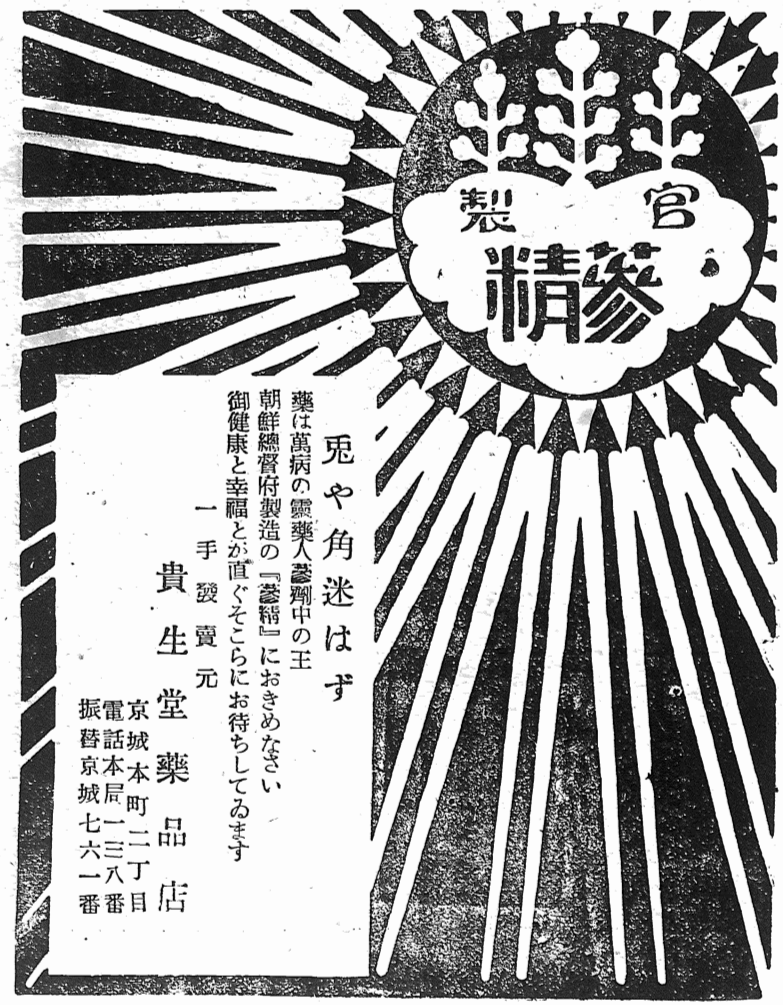
向上會舘靴
一手販賣店
株式會社 丁子屋洋服店

電話本局 長二二三〇番
二二〇九
四二〇九
六二〇九

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

京城黃金町
早川看板堂
電話本局二四七六番

電話賣買、金融利安
公債々券買入、有價證券現物賣買
末松商會
明治町二ノ二
（フランス教會隣）
電話本局一八六八番



兎や角迷はず
藥は萬病の靈藥人蔘劑中の王
朝鮮總督府製造の『蔘精』におきめなさい
御健康と幸福とが直ぐそこらにお待ちしてゐます
一手發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
電話本局一三八番
振替京城七六一番

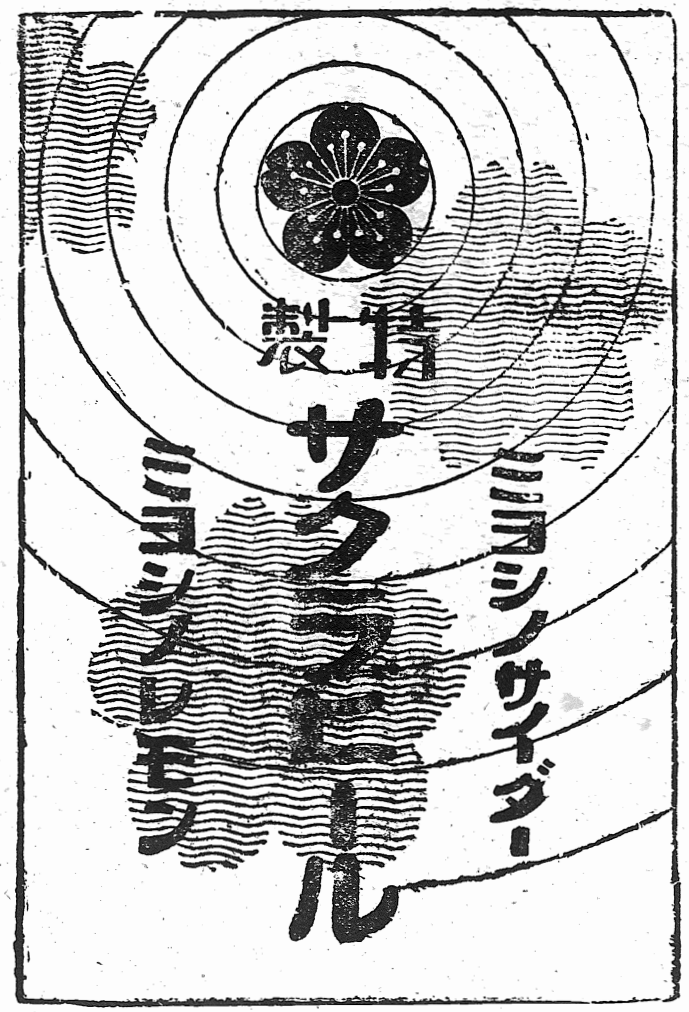
大阪毎日新聞

◎朝鮮言論界の權威
本紙は朝鮮で一番痛快な新聞!!
本紙は朝鮮で一番面白い新聞!!

京城日日新聞

◎公正嚴明報道迅速
本紙は朝鮮で一番意義ある新聞!!
本紙は朝鮮で一番覇氣ある新聞!!

キリンビール
ダイヤレモン



◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

金剛山産松の實應用菓子

金剛飴
金剛山
金剛饅頭
金剛煎餅
金剛羊羹
金剛おこし
金剛しるこ
金剛うに
金剛このわた
金剛でんぶ

京都二城本町丁目
亀屋本店
電話本局二七番
四七五番

◎銘仙と
毛糸◎

株

京城本町
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

金剛山産松の實應用菓子

金剛飴
金剛山
金剛饅頭
金剛煎餅
金剛羊羹
金剛おこし
金剛しるこ
金剛うに
金剛このわた
金剛でんぶ

京都市城本町二丁目
亀屋本店
電話本局二七番
四七五番

清新氣
各部ニ横溢セル
輪界ニ大絶品
遞信局專用車
プリミヤ自轉車
優美實用堅牢車
アイリス自轉車
耐久無比價格至廉
ダンロップタイヤ
型錄進呈
發賣元
東京・大阪・横濱・福岡・京城・倫敦
株式會社 丸石商會
◁各地有名自轉車店ニテ販賣ス▷

京城雜筆（第六十七號）
大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年九月十日發行毎月一回十日發行